



福島56便(視察研修2号)報告

(報告用)

1. 実施日

平成27年10月24日(土)～25日(日)

2. 目的

- (1) 東日本大震災と原発事故の『風化』をさせない。
- (2) 地元の現状、今を『正しく知る・伝える』。
- (3) 自分達に出来ることを『考える』

3. 主催

かながわ「福島応援」プロジェクト (kfop)

4. 協力

大熊町

特定非営利活動法人 大熊町ふるさと応援隊

好間工業団地第三応急仮設住宅自治会

5. 視察研修実施資料

福島56便(視察研修2号) <大熊町様視察研修>資料 v20151004 (別紙)
(大熊町の紹介、大熊町の文化・歴史、地震の概要、
特定非営利法人大熊町ふるさと応援隊紹介、好間工業団地第三応急仮設住宅自治会紹介、視察行程、参考資料、各関係)

かながわ「福島応援」プロジェクト (k f o p)

目次

1. はじめに	3
2. 視察研修場所・時間等	7
3. 参加者	7
4. 視察記録(写真一部)	8
5. 視察研修記録	11
(補足)	50
1. 視察研修便参加者アンケート集計 < () 内は回収・回答数です。 >	50
2. 会計	52

1. はじめに

大熊町長 渡辺利綱 様

今回は、ご協力頂き、大熊町様の今と、当時の状況のことのほんの一部ではありますが、現地を見て知る、お話をお聞きする、そして体感することが出来ました。

また、ご報告が大変遅くなり失礼申し上げます。参加者からの研修報告の取りまとめで時間が掛かってしまいました。参加者それぞれに感じる事が多く、大変有意義な視察研修とさせていただきます。

一つに、復興拠点・復興計画、私達も福島に足を何度となく運ばせていただいておりますが、その中にあり、大熊町様の復興拠点とその復興計画を知らないものが多くおりました。前に向かい進まれていますこと、参加者一同、強く感じました。

一つに、皆様の復興への想い、ご案内頂きました方、お話しをいただきました方、町で活動を進められる方、仮設のみなさん、それぞれに復興に向けた強い想いを感じました。

一つに、大熊町、自然はとても綺麗でした。

山々、川、農地、など、街中の整備はこれからと思いますが、とても綺麗な自然と感じます。一日も早く、元のきれいな街になっていただけたらと思いました。

また、見慣れてしまっている自分に気づき、それでは行けないと感じる参加者、お話しをお聞きしスーッとみなさんがその時にそこに居た、その時の気持ちを感じた参加者。

視察研修と言う形ではありますが、大熊町様のご協力をいただき、今を知ることができ、感じることができ、良かったと思います。

当会が現地に赴く主旨は

- ・自分が現地に行って
- ・自分の目で見て
- ・自分の耳で聞いて
- ・自分で体感して、感じて

そして、正しく伝えることです。大事なことと思っています。

日々ご多用な中と思いますが、町が一体となり、これからの築いて行かれますこと祈願いたします。

ご協力、ありがとうございました。

大熊町 課長 志賀秀陽 様

志賀課長と初めてお会いさせていただきましたのは、2013年9月の2回目の大熊町様の神奈川での交流会の時です。風間様もご来訪頂きました。

その時に、千葉県に避難されている方が、神奈川のお友達に誘われて、と初めて交流会に参加されました。その方は終止、私は何も話しません、言えませんかと言っておられました。震災前の当時のご家族のお仕事の関係等々で、なにも言えないと。

会の終わりに、何人かにお話しをいただくに当たり、最後に少し話しては、とお伝えしても中々、お話しにはなりませんでしたが、重い口を開けられて、それまで閉ざしておられたご自身の想いを一気に吐き出されました。涙を流しながら。避難後一年半経ってようやく。そんなこともありました。

その時の志賀課長と風間さんとのご縁で、今回、視察研修に当たり、ご協力の声を掛けさせていただきました。

今回は、ご案内をいただく中で、“ここによく寄っていた”、との話を伺った時に、多くの参加者が、何度か見慣れてしまっていた自分に気づき、志賀課長が、その場にいた、外から見ているのではなく、志賀課長と同じその場にいる、そんな感じ方をし、改めて自分を見直したものも多くいました。

ご同行いただき、お話しを伺う、とても貴重なことと思いました。

当時のこと、現地の今のこと、そしてみなさんの、復興への強い思いを感じたと思います。

お仕事ご多用な中でのご対応、ご協力、ご案内、大変ありがとうございました。

感謝申し上げます。

お体にご自愛いただき、大熊町のため、ご活躍を祈願申し上げます。

大熊町 係長 風間真由美 様

風間係長には、復興拠点で私達の為に「二つの災害に向き合う大熊町」として

- 忘れない（知る）
- 考える（感じる）
- 伝える

そして、それらが、災害から自分の家族、ふるさとを守る防災手段の一つになることを教えていただきました。

そして、参加者一同が、大きく感じたのは、風間さんの大熊町へのとても強い復興の想い。その強い想いを、私達みなで、強く感じました。すごい。そう感じました。

今回、折角ご準備いただきましたご説明も私達の時間が少なく、全部をお伝えきれなかった、私達も全部をお聞きすることができなかつたのかな、と思っています。もし機会がありましたら、志賀課長と共に神奈川にお越しいただき、是非お話しを伺いたいなと思っています。当会の総会など、2時間程の時間になるかも知れませんが、50人前後の場所などで、是非計画して行きたいと思っています。その時は、是非お声掛けさせていただきますので神奈川に足を運んでいただけたらと思います。

風間様も日々ご多用の中と思います、ご対応、ご協力、ご案内、大変ありがとうございました。感謝申し上げます。

お体にご自愛いただき、大熊町のため、ご活躍を祈願申し上げます。

特定非営利活動法人 大熊町ふるさと応援隊 渡部千恵子 様

町民としてのお立場で、私達の宿泊先にて、当時のご様子などをお話しいただきました。発災当時、避難する中での動き、そこから支援される側から自分達も何かしなくてはと、支援する側へ、そして今も大熊町を伝える、そんな活動を継続されている渡部様の

- アイディアの凄さ
- パワフルさ

に参加者一同、感嘆しました。

渡部様にも、是非機会がありましたら、神奈川でお話を聞かせていただきたいと思います。日々ご多用の中と思います、ご対応、ご協力、ご案内、大変ありがとうございました。

感謝申し上げます。

お体にご自愛いただき、大熊町のため、ご活躍を祈願申し上げます。

好間工業団地第三応急仮設住宅自治会 自治会長 市川スミ様 様

私達の宿泊先にての渡部様と当時のお話しをお聞かせいただきました。また翌日には第三応急仮設住宅を訪問させていただきました。何をするのもなくの訪問に市川様をはじめ、自治会の皆様より温かいお受入れをしていただき、大変ありがたく思いました。

応急仮設住宅を訪問すること、また皆様とお話しさせていただくことも初めての者もおりましたが、それぞれにお話しをお聞かせいただき、色々な事を知ったと思います。

機会がございましたら、また寄らせていただきたいと思っています。

皆様お体に自愛いただき、元気で、笑顔で過ごされますことを願っています。

ありがとうございました。

最後に、参加者の研修記録を項番5に取りまとめました。

- (1) 大熊町内視察して（事実・感じたこと）
- (2) 復興拠点にて復興計画ご説明研修を伺って（事実・感じたこと）
- (3) 特定非営利法人大熊町ふるさと応援隊様のお話を伺って（事実・感じたこと）
- (4) 好間工業団地第三応急仮設住宅を訪問して（事実・感じたこと）
- (5) 参加して（個人全体所感、神奈川県内に向けて）
- (6) 大熊町様へ（町長、町役場、町民の皆様へ）

内容は、それぞれの個人の私見、感じたことです。手を加えていません。それぞれの感じ方として受け取っていただければと思います。

また、繰り返しになりますが、皆様の復興への強い想いを全員感じました、町が一体となり、これからの築いて行かれることと思います。

変わらぬ現実が続いていますが

お体に十分にご自愛いただき、明日へ進んで行かれますこと、祈願いたします。

本、視察研修の経験は、当会の活動報告等のなかでも紹介していきたいと思います（参加者名は未記載とします）。

また、お話は、是非神奈川にもお越しいただき、お聞かせいただきたいと強く感じました。機会、場を設けることが出来ましたら、少人数かも知れませんが、その時はどうかよろしくをお願いします。

大熊町様、皆様、ご多用の中、誠にありがとうございました。
お礼申し上げます。

かながわ「福島応援」プロジェクト
代表 渡辺孝彦／広報 東尚子
参加者一同

2. 視察研修場所・時間等

(1) 平成27年10月24日(土)

- ① J ヴィレッジ (檜葉町、広野町) <11:40~12:30>
(施設案内、蹴球サッカー神社、食堂で昼食)
- ② 大熊町町内 (秋葉台ゲート) <12:40~14:00>
(大野小学校通り~除染先行着手区域~保健センター前~福祉センター前~大熊町役場~陸橋~文化センター前~プラザ大熊~大野駅(西口)~駅前商店街~原子力センター前~東電大熊独身寮前~大野郵便局前~ヨークベニマル横~翔陽高校前~果樹園)
- ③ 大熊町町内 (秋葉台北ゲート) <14:00~14:30>
(IC予定地~県立大野病院前~252号線~大熊中入口前~総合スポーツセンター前~大熊町総合スポーツセンター入口ゲート)
- ④ 福島給食センター <14:30~15:00>
(施設説明、施設内見学)
- ⑤ 大河原復興拠点 <15:00~16:10>
(町職員様より、大熊町立体地図ご説明、当時のこと復興のことなどご説明)
- ⑥ 特定非営利法人大熊町ふるさと応援隊様 <19:00~19:30>
(代表渡部様より、副代表市川さまよりお話し)

(2) 平成27年10月25日(日)

- ① 好間工業団地第三応急仮設住宅訪問 <10:00~12:00>
(仮設住宅訪問と、住民の皆さんとお話し・懇談)

3. 参加者

(1) 参加者数

	合計	女性	男性
参加者	17名	7名	10名
宿泊者	15名	7名	8名

(2) 参加者年代

	30代	40代	50代	60代	70台
年代	1名	3名	7名	5名	1名

(3) 参加者地区

伊勢原市	鎌倉市	相模原市	秦野市	葉山町
1名	1名	1名	1名	1名
横浜市青葉区	横浜市旭区	横浜市神奈川区	横浜市港南区	横浜市港北区
2名	1名	2名	1名	1名
横浜市栄区	横浜市瀬谷区	横浜市都筑区	横浜市戸塚区	静岡県
1名	1名	1名	1名	1名

4. 視察記録 (写真一部)



j-VILLAGE



j-VILLAGE から海側を望む



大熊町内



大熊町内



大野駅



大熊町内

《続き》



給食センター



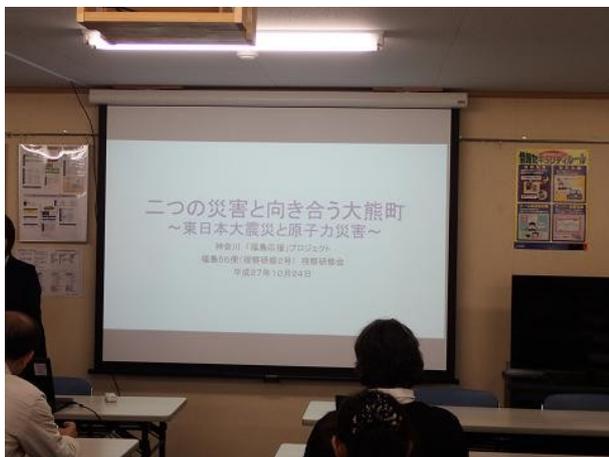
給食センター内



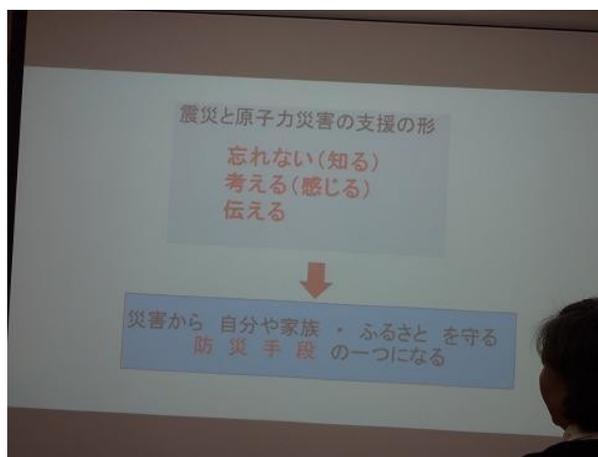
大河原復興拠点



復興ジオラマ



お話し



忘れない・考える・伝える

《続き》



大河原復興拠点



宿泊先でのお話し



応急仮設住宅



お話し



みなさんと



おおちゃん

5. 視察研修記録

- (1) 大熊町内視察して（事実・感じたこと）
- (2) 復興拠点にて復興計画ご説明研修を伺って（事実・感じたこと）
- (3) 特定非営利法人大熊町ふるさと応援隊様のお話を伺って（事実・感じたこと）
- (4) 好間工業団地第三応急仮設住宅を訪問して（事実・感じたこと）
- (5) 参加して（個人全体所感、神奈川県内に向けて）
- (6) 大熊町様へ（町長、町役場、町民の皆様へ）

の参加者研修報告を一覧にしました。お読みいただけたらと思います。

※1、参加の記録の文章は、原則参加者のものとし、変更を加えていません。

記録上、不適切な内容・表現があるかも知れませんが、それぞれの参加が、実際に感じたこととなります。ご理解いただけましたら幸いです。

※2、記録の参加者氏名は無記載とさせていただきます。

(内部記録としては、実名版を保有しています)

【参加者1】**(1) 大熊町内視察して(事実・感じたこと)****(1) J ヴィレッジについて**

実際4階に招いていただいても感慨はなかった。高い階に上がれば上がるほど建物周辺の見晴しはよくなり、敷地内施設の説明がしやすくなる。言い方を変えると、敷地内説明をするには1階で説明すると、せっかく訪問してくれた参加者の理解向上にはならないと思う。

次に4階から敷地内の説明で、沢山の人が廃炉作業に従事しているといいたい内容であった。廃炉作業には当然たくさんの方の力が必要であり、通勤する作業員の駐車場を確保するのは当然である。また、東電が使用後は元あったJ ヴィレッジの状態に戻すのも当然である。当然のことを説明してもしようがない。

今現在の廃炉行程を示せないのも理解できないわけではないが、近々の廃炉作業についての説明があった方がよかったのではないかと。また、どのくらいの人数の人がどのような作業に従事しているかも示した方がよい。さらに、作業員の安全管理についての説明もあってもよいと思う。そのような説明にしないと単に高い所から敷地内の説明のみになってしまう。

(2) 大熊町町内

除染の遅れを感じた。復旧が遅れば遅れるほど、元住んでいた住民は避難先で職に就くなどで住民の帰還が遅くなる。とにかく一日でも早く元の状態に戻ることを願わずにはいられない。

(3) 給食センター

廃炉作業のための給食センターであり、廃炉従事者の作業環境を考えると当然のことと考える。給食センター以外のも住民が働ける施設を建設してほしい。

(2) 復興拠点にて復興計画ご説明研修を伺って(事実・感じたこと)

前向きに努力されていることが理解できた。

田畑を除染しても灌漑の問題、後継者の問題、農作物販売の問題、風評等不安要素を考えると問題山積で大変だと思う。原発被害を風化させないためにも、全国規模で原発事故が発生するとどうなるのかを全国的に講演されてはどうかとも思う。ただし政府の原発再稼働推進の流れもあるので、なかなかすべてを話せないと思うが、町職員という立場から外れ、語り部として講演されてはどうかと思う。私たち神奈川県には原発はないが、横須賀には原子力空母が寄港しており、原発がないからといって安心していただけるものでもない。すでに震災から4年が経過し人々の脳裏からは記憶が薄れつつある。残念ながらマスコミも復興報道が主で、復旧作業については報道が少ない。さらに、水害が発生すると人々はそのような目新しいことに目を奪われてしまうので地道ではあるが原発被害を知っていただく講演を少しずつ進めるべきだと思う。

(5) 参加して(個人全体所感、神奈川県内に向けて)

残念ながら大量のフレコンバッグをみても、避難した時のままの町の状態をみても最初にみた時の衝撃は薄れてしまった。

(6) 大熊町様へ(町長、町役場、町民の皆様へ)

まずは私たちの研修を大熊町として受け入れてくださったことに感謝を申し上げたい。

私たちは南相馬市を中心とした活動が主で、福島県の他の地域への支援の予定は立っていないが、そのような私たちを受け入れてくださったことに感謝したい。

私は大熊町に行け現状を知ることができよかったと思う。マスコミの報道が少なくなる中で、状況を知るにも数字の状況が多く、実際に映像を通しての状況はなかなか知り得ることができない。仮に映像を見せられても映像は復興拠点を説明するだけで、実際に車に乗って移動して、どのくらいの広さかを実感することができるのは行ったものしかわからないであろう。

同行して頂いた時の説明で、帰還希望者ということばがあったが、帰還希望者がどうなるかはわからないが、ぜひ復興拠点到町を起こしてほしいと思う。大熊町という地名を消さないでほしい。復興事業の一つとして人々を呼び込むための企業誘致には力を入れてほしいと思う。特にJヴィレッジという素晴らしい施設をもっているの、サッカー関連事業に関しては積極的に行ってほしい。サッカーをきっかけに全国から大熊町を訪れる人が増えればよいと思う。それによって一人でも大熊町について知る人が増えれば幸いである。

一方で私ができることを考えると、大したことはできず、周りの人に大熊町の現状を知らせることぐらいであろう。私は周囲の人と接触する機会がすくないので、本当に、本当にわずかな人にしか現状を伝えることしかできない。しかし、説明を受けた者の責務として何らかの機会を通じて大熊町の現状を伝えることは継続したい。

また、時間が取れれば何らかのかたちで大熊町ボランティアに参加したいと思う。

【参加者2】**(1) 大熊町内視察して(事実・感じたこと)**

震災後の大熊町内の様子は、報道などでも取り上げられることが少なく、実際に見る機会を頂けて良かったです。

大野駅周辺、メインストリートが震災直後のままになっている様子、また帰還困難区域では被害状況の詳細な調査すらできていないという状況、暮らしていた場所が廃虚同然の姿になっていることに対する町民の方々のお気持ちを思うと、いたたまれません。

お話を伺いながら車窓から外を眺めていると、大熊町から神奈川県に避難されている方々とのお話で出た言葉が思い出されました。

・一時帰宅できるようになってから何度か帰ったけれど、今はもう、ほとんど帰らない。帰る気が起きない。

・大熊町は本当にきれいで、いいところだった。

給食センターができたことは、原発の廃炉作業に携わる方にとってとても良いことだし、大熊町で働きたいと希望する人が多かったということも、将来への一歩になるのかなと思います。

(2) 復興拠点にて復興計画ご説明研修を伺って(事実・感じたこと)

冒頭のお話で、震災前の大熊町を知っている職員が減っている、若い世代の職員の離職率が高い、大熊町の未来をどう考えればいいのか迷っている、とのお言葉が深く印象に残りました。平成30年を目標に「住める環境」を整備するという計画が示されていましたが、これから数十年続くであろう廃炉作業や放射線量との戦いを考えると、どうやって大熊町を若い世代につないでいくのかを見据えて、町づくりをしなければならぬと思います。たやすいことではなく、職員の方々の負担が気に掛かります。

ご説明にあったように、「復興への時間軸が定まらない」、「除染計画がまだ明確にならない」という課題、町が3区域に区分されてしまったため町民の間でも軋轢(あつれき)が生じていることは、町の職員の方々だけで解決できるものではなく、県や国も、町に負担を掛けすぎることなくしっかりと取り組んでもらいたいと思います。

(3) 特定非営利法人大熊町ふるさと応援隊様のお話を伺って(事実・感じたこと)

震災直後から避難所へ、そして自主ボランティア活動の立ち上げなど、当事者の方でないとは分からないお話を聞かせていただき、万が一、首都圏で災害が発生したときにはぜひ参考にしたいと思いました。

大熊町は(原発立地の町であるため)いち早く避難の準備が整ったという話は聞いていましたが、3月12日早朝には避難開始、バス70台が確保されていたということは驚きでした。

お話の中で特に印象に残った点は、次の2つです。

・「自分も役に立っている」という思いを持ってもらうこと

・お米と水、カセットコンロ、鍋を車に積んで避難されたという、先を見越す想像力の重要性
「復興拠点ができれば帰れる」と希望を持っている人は多い、帰れる人から帰って、町をきれいにしていく、という前向きなお言葉がありましたが、これまで大熊町から避難されている方々からそうした声を聞いたことがなかった(ほぼ諦めている、という方が多い)ので、意外に感じる一方で、ふるさとへの強い思いが感じられました。

(4) 好間工業団地第三応急仮設住宅を訪問して(事実・感じたこと)

よく知らない団体の、はっきりしたプログラムもない訪問にもかかわらず、多くの方に集まっていたに恐縮に思いました。

普段から月2回のお茶会に男性も女性も集まっておられ、掃除などの行事にも参加されている様子なのは、自治会長である市川さんのお人柄、そして大熊町役場との距離感の近さ、安心感もあるのかなと思いました。

住民の方のお話を伺う中で出た話題で、復興住宅への入居(抽選)に関しては、現在の仮設住宅や元々のお住まいの地区といったコミュニティが維持できるような、何らかの措置(たとえばグループ単位での申し込みなど)を、町としても考えてほしいと思います。

(5) 参加して(個人全体所感、神奈川県内に向けて)

避難所でのルール作りや、自主ボランティア活動については、どのような災害の場合でも参考になると思います。

- ・子どもに言い聞かせるような、「順番を守る」、「けんかをしない」などの基本的なルール
- ・朝晩の声掛け
- ・町名が入ったジャンパーや消防団の半被などは取り次ぎ役として役立つ

また、どんなに厳しい状況でも、町、ふるさとを残すことに強い思いを持っている方々がいることを忘れてはならないと思いました。

(6) 大熊町様へ(町長、町役場、町民の皆様へ)

今回の町内視察に向けた調整、当日のご同行など、お忙しいなか本当にありがとうございました。こちらの不手際があり、ご担当の方々にご迷惑をお掛けした点は申し訳ありませんでした。町の復旧、復興に深くかかわっておられる方々のお話を直接伺えたことは、報道や伝聞で聞くのとはまったく違います。これからも、今回訪れた場所、お会いした方々のことを気に掛け、関心を持ち続け、できることがあるのか、あるならばどうすればいいのか、考えていきたいと思えます。

【参加者3】**(1) 大熊町内視察して(事実・感じたこと)**

比較的新しい住宅や施設が多く、通りも整備されていたのは想像していたこととは異なっていた。

念願のマイホームを建て、未来ある生活を夢見ていた中に、避難をせざるを得なかったのかなと勝手に想像した。

自分自身反省しなければならないのが、被災した現場を見なれているせいか、今回の町内の視察で驚くようなことはなかった。これが自分自身の「風化」なのではないかと感じ、もう一度原点に立ち返って考える必要があると認識した。

(2) 復興拠点にて復興計画ご説明研修を伺って(事実・感じたこと)

自分が知る限り、多くの市町は除染して線量下げて”さ一住んでください”というような感じだが、大熊町は大河原地区にまとまって復興するというので大変驚いた。

このような情報は知らなかったため、まだまだ日本全体にも知れわたっていないのではとも感じた。個人的には大熊町のような形が(苦汁だが)現実的な計画ではないかと以前より思っていたので、今後も色々と大変だとは思いますが、復興に向け頑張っていたいただきたいと思った。

同じ日本人として、自分にはこれから何ができるのか、考えさせられた。

(3) 特定非営利法人大熊町ふるさと応援隊様のお話を伺って(事実・感じたこと)

TVはインターネット等の情報と違い、生の声は心にひびいた。

ただ、自分自身の反省だが、4年前のことを「聞いている」という感覚になってしまったのが、正直な感想だった。

自分自身としては、今までのことよりも、これからの未来に向けてどうして行くべきか、というお話を伺う方が、良かったのかなと思った。

(4) 好間工業団地第三応急仮設住宅を訪問して(事実・感じたこと)

自治会長の市川様他、皆様には積極的に話しかけていただき、とてもうれしかった。しかし、逆に気をつかわせてしまったのではないかとも感じた。

自分自身はこのような機会は初めてで、元々このような活動は苦手とされているため「話を聴くだけでもいい」とは言われるものの、何をどのようにしていいのか戸惑った。

人には向き、不向きがあり、自分には不向きだと思った。

(5) 参加して(個人全体所感、神奈川県内に向けて)

今回このような「見る」ための福島は初めてだった。個人的にはもくもくと作用して帰ってくる方が向いているが、現場を知るのは大事だと思い今回参加した。

参加してみて、やはり自分自身は、もくもくと作業をしていく方が向いていることを再認識したが、そんな中でも、いくつかの発見があった。

1つは、自分自身が福島の光景を見なれてしまっていること。これは良くないことだと思った。もう1つは、新たな情報が得られたこと、日常より色々な情報を取っているつもりだったが、今回知りえたことは沢山あった。

実際に自分の目で見て、聞くことの大切さを知った。

同じ日本人として、多くの方が福島の現状を知ってもらいたいと思った。

(6) 大熊町様へ(町長、町役場、町民の皆様へ)

町長はじめ、職員の方々は毎日本当に大変などだろうと想像します。自分自身、何かお役に立てないかと思うのですが、現実には行政等のお手伝いはできないので、応援するしかありません。

軽々しいことは言えませんが、無理せずに頑張ってくださいと思います。

大熊町の方々へ、何が適切な言葉か浮かばないのが現状です。自分自身に何ができるのか、できないのか、わかりません。

まずは、今の現状を知ること。そして考え、できることをコツコツとやっていきたいと思えます。

【参加者4】**(1) 大熊町内視察して(事実・感じたこと)**

- ・帰還困難区域内での住宅の試験除染作業は周りに足場を組み普通にメンテナンス作業をおこなっているように見えるが、見えない放射能との戦いは本当に大変なものだと改めて感じた。
- ・福島給食センター長からお話を伺い、雇用を生み、地場の食材を使用し、廃炉作業従事者の方に暖かい食事を提供できていることは良い取り組みだと感じた。

(2) 復興拠点にて復興計画ご説明研修を伺って(事実・感じたこと)

- ・説明してくださった方は図書館司書から復興事業への転身で、大変な勇気を持っていらっしゃると思う。
- ・震災翌日の早朝から着の身着のまま避難が始まり、4/3には二次避難所に移り、そして4/22には町が警戒区域立ち入り禁止となった町民の皆様の大変さを改めて知った。
- ・避難先で時間が経過する毎に変化する不安が町民の方にあること、仮設住宅自治会長様の負担が大きいこと、避難されている方が未来への希望を抱ける支援が必要なことを知った。
- ・復興拠点は平成30年完成を目指しているが、計画通りに行かない、スピードが上がらない、と職員の方が大変ご苦労されていることを知った。
- ・ベテラン職員が退職とかで減り、若手職員の方が抱える苦悩を感じた。

(3) 特定非営利法人大熊町ふるさと応援隊様のお話を伺って(事実・感じたこと)

- ・避難先での町民との対応に町職員の方も大きなストレスを抱えていることから、町民と町の架け橋を目指しNPO設立されたとの趣意を伺い感銘を受けた。
- ・大河原の復興拠点から復興が始まると思っいらっしゃる町民の方が多いこと。
- ・一方では、元の自宅に戻れなかったら、戻っても元のように農業が出来ないのであれば帰還しないとか、本当に十人十色のお気持ちがあることを知った。

(4) 好間工業団地第三応急仮設住宅を訪問して(事実・感じたこと)

- ・仮設住宅では生活音に本当に困っていることを改めて知らされた。
- ・戸数122戸のうち約半数の方は居住地を決め、出て行かれている。
- ・一方でここ仮設に居るしかないとお話を伺った方はおっしやっていた。簡単にはいかない現実がある。
- ・お話を伺った方のご自宅は中間貯蔵建設候補地にあり、もう戻れないと5回ほど繰り返されていた。

(5) 参加して(個人全体所感、神奈川県内に向けて)

- ・Jヴィレッジでご案内くださった東電の方は双葉郡ご出身で、加害者であり被害者でもあるという、今回の事故の難しさを改めて感じた。
- ・視察やお話を伺い、避難されている方の帰還や居住について何もすることができないこと。
- ・神奈川に避難されている方々が故郷を思い、町や避難者同士の繋がりを必要とされる限りそのお手伝いを続けていきたい。
- ・福島県内の仮設住宅に足を運び避難者の方との交流と共に、神奈川に避難されている方々と繋がりが持てるようなことを考えていきたい。

(6) 大熊町様へ(町長、町役場、町民の皆様へ)

・復興に向けて大変お忙しい中、視察ご案内や復興に向けての取り組みをご説明していただきありがとうございました。

自分の目を見たこと、お聞きしたことを踏まえて避難されている方々に自分が何かお役に立つことはできないかをよく考えて行動していきたいと思っています。

・大熊町復興拠点の工事進行を見守りつつ、ぜひまた訪問させて頂き、お話を伺えればと思います。

・そうして、将来帰還後にまた美味しい梨やキウイを栽培して頂き、食べに行きたいと願っています。

【参加者5】

(1) 大熊町内視察して(事実・感じたこと)

避難されている方からうかがっていたように“新しい家、まだ建てて間もない”その年代の方々、小さなお子さん達と避難され、さぞ無念であったろうと

家々も、青空も、まるで何もなかったかのように・・・荒れたお庭や道路をのぞけば。

逆に、つぶれ、くずれ落ちた家、ああここもと、南相馬市や富岡の町と同じ・・・(と、私もあまり驚きが少なくマヒしている)

そして、今年千葉に移られて初めての収穫の梨を頂いた“S農園”の前を通った時、Sさんの宝物であった梨園が・・・こんな風に荒れ果てたことに、Sさんは足を向けに来ることがあるのだろうかと思いました。まだまだお若い方、すべてきっぱり気持ちを切りかえ、新しい土地での沢山のご苦労が・・・でも“まだ納得いかない梨作り”と、あふれるファイトを思い出し。それぞれの気持ちに少しでもふれ近づける事がほんの少し、知る事ってこんなに違うと思いました。

(2) 復興拠点にて復興計画ご説明研修を伺って(事実・感じたこと)

・驚きました、大熊町に復興拠点となる街作り計画がある事。何もかもまだまだ不可能と思っていた。

・手をこまねき時間が過ぎて行く事、風化して行くだけの時への恐怖、あり、そうだよな、何かせずにはいられない。

・除染許可推進・・・風も吹く、雨も降るし、うーん 39ha そして、いろいろな物を運ぶ常磐道がまん中を・・・うーん、でした。

・j ヴィレッジ

東電の“福島への責任”というポスター。

ここで働く東電の方々、これからもずっと、何十年とここで働く方達

何十年という先続く仕事、タイベックス使用済の量“燃やして圧縮して埋める”、許容量を超えた時の自分の年齢での立場、ああ先の事は先の人が考える・・・誰にも想像がつかない事を、もくもくと今出来る事をやる人がやる以外ないんだ。モチベーションを維持してここでの仕事を続けるむずかしさを、思うと、苦しくなりました。

でも、やらなければならない。同じときに生きている者として

目をそらす事のないように注意しようと思いました。

(3) 特定非営利法人大熊町ふるさと応援隊様のお話を伺って(事実・感じたこと)

・お二人とも、バリバリと音がするような、若さと行動力を備えたすてきな方と驚きました。(避難された位の事情を想像していたので)

・自分の感覚が他の浜通りの町より、大熊は二進も三進もいかない所というのがありました。

・大熊町に拠点を作り、30年かけて住めるように努められるとお話を伺い、子孫の為、町を守り続ける為にとふんばり活動されている。すてきな年代の方がいたんだと、本当に感服しました。

残り少ない自分の人生を、今ふんばれば、まだ楽しめるぞという年代なのに、街づくりに毎日ふんばり続ける。自分達はこの大熊の応援として何ができるのでしょうか、かかわり続けて行く事、関心をなくさず、ずーっといる事。最低限、その事は、でも、もっともっと！。

(4) 好間工業団地第三応急仮設住宅を訪問して(事実・感じたこと)

やはり、にぎやかな作品がいっぱいの集会所でした。

- ・しかし、定期的におとずれるボランティアもほとんどいない、自主的なお茶っこがあるだけで・・・と。
- ・第一、第二との交流もないとききました。第三は役場からの情報が早くて良い。代表が何でも言ってくれるので安心している。
- ・半分近くが空いていて、まあ人は集まらないけど、両隣はあまり家にいない若い男性なので、気を使わずにすみ気が楽。
- ・息子さん、お孫さんとはほとんど連絡がない・・・“自分も意地っぱり、息子も似ていて意地っぱり”いいのよ、好きにして暮らせて気楽よ。(ああ、家族の分断が…千葉に一度は一緒に避難され、自分だけ戻ったとの事)
- ・こうやって話を聞いてもらってさっぱりしたわ、今日は良く眠れるよ
- ・何もしなくていいのよ。話をするだけでネと。
- ・想像以上にきれいな部屋(リホーム済みだからか)でしたが、収納も少なく、2DKで3人分の布団を入れ、洋服を置いたら、ですね。20人近く入って立っていましたが座ったらどうなるのかしら、お盆などで親戚が集まっても家に入れず外に立って交代で入るよと。
- ・いろいろな仮設があるのだな、畳がへこんでいたり、カビが出ていたり、もっともっと不備なものもあるのだろうか。

(5) 参加して(個人全体所感、神奈川県内に向けて)

大熊がこんなに動いているとは思いませんでした。

一度かかわった方、そして多分、多くの方たちが訪れることのなくなった仮設(?)

どうにか、継続することはできないのか。

(2度と来ないであろうと、あきらめている多くの方)

直接の支援ができなくとも、どうにか、お便りを出すとか、自分にできる事。

いい訪問の時間がもてた事、感謝します。

何をやりましょうとか、もう、そんなことはさんざん・・・

いいです。来てくれるだけでと。

鎌倉や福岡のおみやげとか、とても喜んで頂けました。

ありがたかったです。

(6) 大熊町様へ(町長、町役場、町民の皆様へ)

視察・研修と機会をいただき、本当にありがとうございました。

東電とのかかわりは、南相馬市ボランティアセンターで朝の集合時、歩かれている時、おはようございますと挨拶される時だけです。

- ・いろいろな摩擦のある東電の大熊の方々、この5年近くの長い時間を、苦しまれながら、くぐりぬけて今。部外の私達に、こんなふうにJヴィレッジ、給食センターとご案内いただき、お忙しい中感謝します。
- ・そして役場の方々、大熊町を生かし続けるエネルギー
どうか、全国の沢山の仲間が思いを寄せている事、等。
お身体もご自愛下さい。
- ・研修参加して、本当に良かったです。ありがとうございました。

【参加者6】**(1) 大熊町内視察して(事実・感じたこと)**

家の入口や国道6号線沿いにバリケードが設置されているのは初めて見る光景でした。バリケードは空き巣対策で設置したとのことでしたが、震災当初は現金等が主に狙われていたが、現在はトラクター等の農業機械の盗難が発生しているとの説明を受け、いまだに盗難被害にあっている帰還困難区域の現実を知りました。帰還困難区域の除染先行着手範囲では、震災の少し前に建てたばかりの真新しい住宅街で除染作業をされていて、何気ない日常が一瞬にして変わってしまった様子が伺えました。大野駅前では、商店の瓦が道路に散乱しガラスは割れたままで、震災当時の状況が残っていたことに大変驚きました。とても4年7ヶ月が経過したとは思えない状況でした。

(2) 復興拠点にて復興計画ご説明研修を伺って(事実・感じたこと)

風間係長のお話を聞いて支援物資の偏りが多かったのは聞いたことがありましたが、トラウマになる位同じものが大量に送られたと聞いて支援物資を送る側や届いた物資を分配する方々がもう少し気を使ってあげることができなかったのかと感じました。

その他にも避難所で新聞の争奪戦や、デマ、チェーンメールなど混乱を引き起こす事態が発生していたと聞いてショックでした。

また、支援するスタッフがメンタル面で追い込まれていったという話を聞いて、とても心が痛みました。皆のために一所懸命に取り組んでいるのに興奮状態の人からきつく言われ、苦しんでいたことはとても残念でした。

仮設住宅に移動しても、東電から賠償金をもらったということで、花火が打ち込まれたり、車にいたずらされたりしたので自分が大熊町民であるということを知られたくないということを知り、聞いて怒りを覚えました。大熊町民は好きでこのようなことに巻き込まれた訳ではなく、とても大変な目に合っている所へ追い討ちをかけるようないたずらは決して許されるものではありません。避難先や仮設住宅の受け入れ先で、平穏な生活が送れるように見守ってあげられないものなのかと感じました。ごく一部の人間の行為が多く町の心を傷つけていたということを知り、とても残念でなりません。

(3) 特定非営利法人大熊町ふるさと応援隊様のお話を伺って(事実・感じたこと)

多くの写真で、震災直後の様子から、数ヶ月後、そして直近の様子を見る事ができて当時の混乱の様子を知ることができました。

(4) 好間工業団地第三応急仮設住宅を訪問して(事実・感じたこと)

・仮設住宅を拝見して 訪問させて頂いた好間工業団地第三応急仮設住宅には、プレハブ型と木造型の仮設住宅で家族向けと単身者向けがあり、今回は木造型の家族向けと単身者向けの仮設住宅の中を拝見させて頂きました。家財道具が何もないのでそこまで狭くは感じませんでしたが、実際は最低限の家財道具を置くと身動きがしにくい広さであると思います。壁も薄く隣の部屋の生活音が筒抜けでストレスも溜まりトラブルにも発展していると聞いてもう少し住環境を整えることができないのかと思います。スペースが許すならば4畳半ではなく、1部屋は6畳間にして防音もある程度しっかりしたものにしてもらいたいです。雨風が凄(しの)げればそれで良いということではなく、被災された方が仮設住まいで更なるストレスに晒(さら)されないことが重要ではないかと強く感じました。また、木造型では仮設住宅で良く問題とし

て取り上げられる結露によるカビの発生なども無いようで、今後の仮設住宅の参考になるのではないかと思います。

・集会所でお話をさせて頂いて

お話をさせて頂いた方は、お一人でお住まいの女性でした。震災当時は息子さんご家族と避難所に行き、数日後には茨城の親戚宅へ避難されたと伺いました。息子さんご家族と1年程一緒に茨城県内でアパートを借りて自主避難され、その後今回お邪魔した第三応急仮設ができると聞いて息子さんご家族と離れ、お一人で仮設住宅に入居されたそうです。一時帰宅が許される範囲で頻繁にご自宅へ帰り、ご自宅の掃除などをしていらっしゃるそうです。現在は、いつでも戻れるまでになり掃除をしながら、お昼ご飯をご自宅で食べて仮設住宅に戻られるそうです。お話を伺っているなかで、以前横浜市にお住まいとのこと、私の自宅近くにお住まいだったと分かり大変驚きました。福島県の被災された方とお話をすると必ずと言っていいほど神奈川県に過去にお住まいだったとか、お子さんが結婚して神奈川県に住んでいて頻繁に通っていたなど神奈川県と何らかのご縁のある方がいらっしゃるって不思議なご縁を感じています。

今回お話をさせて頂いた方は、とても前向きに日々を過ごされていて、帰れるのであれば早くご自宅へ帰りたいと強く希望されていました。アンケート等では時間が経つごとに帰りたいという方が減っている中で、今回の方のように今でも強く帰りたいという思いを持って生活されている方もいるので、一日も早くご自宅へ戻れるよう復興が早く進むことを願うばかりです。

(5) 参加して(個人全体所感、神奈川県内に向けて)

今回の視察で、見たこと、聞いたことを正しく伝え、大熊町の“いま”を皆と共有できるように発信できればと思いました。特に今回お会いした大熊町の方々は、皆さん前向きで元気のある方ばかりでしたのでお手伝いを必要とされる時に kfor を含め神奈川の皆でお手伝いすることができればと思いました。

(6) 大熊町様へ(町長、町役場、町民の皆様へ)

今回はお忙しいなか、私達の視察の為に大熊町の多くの方々にご協力を頂き、大熊町の“いま”を見て、聞いて、感じる事ができました。

復興拠点への移転や除染作業にはまだ時間を要すると思いますが、安全に一日も早く大熊町の方々が町に戻れるよう心より願っております。

これからも大熊町の方々と共に歩んで行けるように微力ながら応援を続けていきます。最後になりましたが、今回の視察の為に尽力頂きました大熊町の皆様に御礼申し上げます。

【参加者7】

(1) 大熊町内視察して(事実・感じたこと)

4年数か月前までは確かに大熊町の方たちの生活がここの在ったのだと思うと言葉がありません。

案内をしてくださった職員の方も「この店にはよくマッコリを飲みに来ました」の言葉はとても重く町の一つ一つ住んでおられた方々の思いが感じられました。

- ・町に入る時のゲートでのチェック
ここから先は自由に出入りができない場所・・・原発
- ・町の中にイノシシの子供がいる
- ・個人宅入口に各ゲートが設置・・・泥坊よけ
農機具までが盗まれる

大熊町の方々にとっては非日常的な出来事が4年の間に日常になっている

その中でも多くの方が希望を持って復興に向かっていきます。

時に若い人の姿を見るとうれしいです。

(2) 復興拠点にて復興計画ご説明研修を伺って(事実・感じたこと)

3. 1 1 当時のお話と今後復興に向けての計画を聞きました、

「大熊町民という事を知られたくない」

心ない誹謗中傷「お金もらえていいね」など

同じ大熊町民でも地区によって賠償金額が違う現実

厳しい現実と向き合っている町

どんなことがあっても「ふるさと大熊町」を残すとの強い思いが400ヘクタールの土地を町再生建設拠点にする改革につながっている。30年40年計画

特産物・・・梨、キューイ、ワイン

これがまた大熊町の特産として市場に並ぶ日を希(のぞ)みます。

大熊町は中間貯蔵施設建設も受け入れています

これからまだまだ課題が出てくると思います。

<支援の形>

- ・忘れない(知る)
- ・考える(感じる)
- ・伝える

職員の方が「トラウマ、で今も“赤いきつね”のカップ麺を見ることも食べる事もできない」と言っていたのが印象的でした。

(3) 特定非営利法人大熊町ふるさと応援隊様のお話を伺って(事実・感じたこと)

渡部さん、市川さんの地域に根ざした草の根活動のパワーを感じました。

3. 1 1 当時の様子を伺いましたが自分にとってはまだまだ想像の域しか達していないと思いました。

「避難場所での創意工夫」

- ・カップ麺の器を利用したお手玉には「なるほど」と!
- ・町の名前・ロゴが入ったジャンパー、半被が目印で安心感につながる

- ・通路で区割りをする
- ・指示ではなく、言い聞かせる！明瞭、簡潔に。

印象に残ったのは中間貯蔵施設の話は一度あっただけでその後は何も説明がない
なかなか町民との話が進まない、と言われていたがどこでどうなっているのか？分からない！
との言葉でした。国は誰と話合っているのか？

- ・避難場所では段ボールベッド等

横浜市で行っている学校の受水槽を活用した飲料水確保等、皮肉ですが災害が起こるごとに新しい対策も生まれていることもあります。

(4) 好間工業団地第三応急仮設住宅を訪問して(事実・感じたこと)

初めて仮設住宅でした。

TVでは見ていましたが、空き部屋でしたので作りは良くできていたと思いました。物を置くと狭い、また木造りでしたのでランクは上だと思いますが、プレハブは大変です。仮設利用にも色々な規制があります。もっと住んでいる方が利用しやすい様に出来ないのか？

お話をさせていただいたWさん(婦人)

ご高齢ですが考え方がとても前向き

お一人で住んでおられました

震災時に離れてしまった猫ちゃんが見つかり

戻ってきて一緒に居る事も元気の素なんでしょう

主務も多彩でパッチワーク、花壇等

パッチワークは仮設の方にも教えておられました。

お隣の方にも一緒に参加される様に声をかけたそうですが「私はいかない」と言われたとか。

あの日以来、本当にご苦勞をされた福島の方々がおられる事を決して忘れてはならない
胸が痛いです。

【参加者 8】**(0) はじめに、視察研修参加の動機**

東京電力(株)福島第一原子力発電所(以下、「1F」という。)は、しばしば問題となった1～4号機建屋、汚染水・地下水対策など現場状況の改善工事がようやく完成したばかりで、復興工事は未だであり、放射線量は依然として高い。各所に山積された除染土を詰めたフレコンバッグを1F付近に設ける中間貯蔵施設建設候補地に移し、廃棄物を減容焼却施設で処理して初めて、居住制限区域や避難指示解除準備区域への住民の帰還が可能となる。大熊町・富岡町・双葉町では、30～40年にわたる廃炉工事を見据えつつ、各町ごとあるいは広域連合で復興事業を策定すべく計画している。

私は昭和46年、日本ダム協会に就職した。最初はダム技術専門の月刊誌の編集であった。昭和48年3月号で、灌漑用水と1Fの原子炉6基の冷却水供給を目的としていた坂下ダム(大熊町)を掲載した。その他の浜通りのダムもほとんど掲載した。

その後ダム工事総括管理技術者認定試験を担当し、真野ダム(飯舘村)、三春ダム(三春町)、木戸ダム(檜葉町)、滝川ダム(富岡町)などで、各方面に大変お世話になった。浜通りの人々、流域の状況、地形・地質など記憶に強く残っている。震災発生時、坂下ダムは1Fが津波で全電源を喪失した後も、今も冷却水の送水にスタンバイしている。

平成13年3月退職後、横浜みなと博物館の展示説明ガイドをしているが、ここでも川俣町や原ノ町などと縁があることを知った。私は、今、浜通りを訪れ、人々や町の様子、各ダムの現状などを見守っていきたいと思い、ボランティア活動をしている。

今回、大熊町の現地を視察して現状と課題と展望を知りたいと、研修に参加した。

(1) 大熊町内視察して(事実・感じたこと)

今回、大熊町内を視察して、復興への第一歩が始まっていると思った。大川原地区の大熊町復興拠点、給食センターなどの事業、また、植物工場や廃炉関連企業事務所設置計画などは、1Fの廃炉までの全工程の中ではわずかの進捗であるかもしれないが、町民の雇用も創出し、植物工場ができれば大熊町産の食材が産まれることになる。

大熊町は、国道6号線を境に1F廃炉と中間貯蔵施設建設候補地を抱えるという最も厳しい環境下でも、町の面積の大部分を占める帰還困難区域および居住制限区域の復興計画への取り込みを先送りにするのではなくて、その土地利用方法の検討と復興計画への反映を大熊町が積極的に仕掛けているという感じを受けた。

線量の高い区域が除染しても居住や企業の誘致が可能なレベルに至らないリスク、また、国の施策や東電の対策事業と大熊町の復興計画が同床異夢的に乖離するリスクもあるかも知れないが、原発事故の処理と復興計画は国と東電にとって絶対に成功させなければならないものであり、大熊町は計画している復興事業を是非成功させて欲しい。

その実績や体験が、今度は他の市町村の計画を勇気づけるものになると思う。無難な事業を否定するものではないが、リスクを避けていては成るものも成らないと思う。

また、昨年秋実施した大熊町住民への町への帰還についてのアンケート調査結果では、戻らないが57.9%、戻りたいが13.3%、判断つかないが25.9%とのことであった。

約1300人の町民と廃炉工事や工業団地などで働く約2000人の新住民との大熊町であるが、これを後ろ向きに考えるのではなくて、今後は前向きに考えていけばよいと思う。

NPO大熊町ふるさと応援隊の渡部理事長のお話しも伺って、帰還希望する大熊町民には前向きな姿勢を感じた。

(2) 復興拠点にて復興計画ご説明研修を伺って(事実・感じたこと)

震災発生後、大熊町民は会津地方、浜通り地方、中通り地方に避難した。その後、入・退出があり、平成27年9月1日現在で、会津地方には1685人、浜通り地方に4807人、中通り地方に1716人が避難している。

町役場は、会津若松市に本庁舎が、また、いわき市にも庁舎がある。仮設住宅も同様に両市に建設されており、平成27年8月現在で、会津若松市には766戸(うち入居戸数409戸)、いわき市には654戸(うち入居戸数499戸)の仮設住宅があるほか、民間借上げ住宅などに住民は分散している。

大熊町の志賀課長と風間係長のご案内で帰還困難区域、除染実施計画区域400haのうち除染先行着手地区95haを視察し、今年開業した福島給食センターなどを見学した。先行着手地区の家々には作業足場が設けられ、屋根などの除染が行われていた。先行着手地区の線量は $5\mu\text{Sv/s}$ 程度、除染済みの町役場付近は $2\mu\text{Sv/s}$ 程度とのこと。

給食センターは1Fまで9kmで、昼食3000食の給食事業の目的、単価380円、食材、雇用(大熊町民7/100人)などの説明を聞き、厨房設備を見学した。この他、大熊町は復興拠点地区に復興住宅とコンパクトシティ、廃炉研究施設誘致も計画している。

農業では、大熊町の特産であったナシは剪定されずに伸び放題になり、キウイフルーツも同様の状態となったが、町では植物工場で試験栽培を始める計画と聞いた。

除染実施計画区域では県立大野病院、第三セクターのステーションホテル、他の公共機関の建物などがセイダカアワダチソウに囲まれ立っていた。常磐線の線路沿いの除染には来年度から着手し、不通区間の早期開通をめざすとしている。

その後、大川原地区にある大熊町復興拠点内の大熊町クリーンプロジェクト共同企業体事務所で、大熊町の風間係長から震災発生時の住民対応と心構え、会津若松市への町ぐるみ避難の状況(現在も町役場同市内にある)、雪国からいわき市への転出など、大変参考になるお話を聞いた。また、坂下ダムに駐在する大熊町の鈴木連絡所長からは、防犯・防火活動は付近の町村と双葉郡広域連合で対応しているとの説明を聞いた。

(3) 特定非営利法人大熊町ふるさと応援隊様のお話を伺って(事実・感じたこと)

24日19時から、宿舎で特定非営利法人大熊町ふるさと応援隊の渡部理事長と、いわき市内の大熊町好間工業団地第三応急仮設住宅自治会の市川会長から、震災発生時から町ぐるみ避難にいたるまでの混乱と対応、連絡・広報の課題、輸送・救護の問題点、避難先での衣食住の問題、ボランティア活動の立ち上げなどについて、東日本大震災発生時の実際の体験に基づく次のようなお話を伺うことができた。すなわち

- ・混乱防止には、幼稚園などの保母さんの園児に対するような言葉づかいが有効である。
- ・擁護老人施設入院者などがバス等で遠距離避難することで病状が悪化することが多い。
- ・大熊町でも震災の死者124人のうち、直接死は11人、関連死113人であって、高齢者などの震災弱者に対する意識が、致し方なかったとは言え、不十分であった。
- ・体育館などでの雑居避難の場合、通路で行・列を区分してであると、緊急患者発生などに際して有効である。

これらの体験に基づく意見は、同様な事態に直面した場合、適切に対応するための貴重な示

唆となった。

(4) 好間工業団地第三応急仮設住宅を訪問して(事実・感じたこと)

10月25日9時30分 いわき市の好間工業団地内の大熊町町役場に隣接する第三応急仮設住宅に到着。木質平屋建て家族向け・単身者向け合計120戸(現在入居者56戸)を見学した。志賀課長、市川自治会長から居住性(遮音性)その他について説明を受けた。

自治会集会室は3DKの一戸建てで、会議室・幼児用遊戯室・ストレッチなどを備えたジムに区分され、会議室には大熊町の復興計画などに関する調査報告・研究会や懇談会資料が入居者の閲覧に供されていた。壁には風景や行事の写真が飾られていた。

市川自治会長の呼びかけで、居住者7名(男性2、女性5で若い世代はいなかった。)に出席いただき、フリーな懇談会を開催した。私の隣の女性は、当初、会津若松市に避難したが、気候が厳しく、浜通りの仮設住宅に移転して本当によかった。買い物は不便であるが、我慢できる範囲と話された。その隣の男性は1F建設当時から原発建設工事に従事し、その後、その専門的な技術で全国各地の原発工事現場を歩いたと話した。

大熊町の現状については悲しいと言い、復興には時間がかかる。大熊町の復興は帰還する町民が少なく、家族の就職、教育、医療などの条件が悲観的であると語った。

教育については、会津若松の歴史的な成果や伝統から、町立学校以上に評価していた。

途中から、小学生の兄妹が来たので、持参したどんぐり独楽で遊んだが、自分で独楽を作りたいというので、ドリルでどんぐりに穿孔し、楊枝を刺し、頂部を輪状に着色するまでを教えて、その後、自分で作らせた。子供たちはどんぐり全体を緑色に着色したり、トトロやドラえもんを描いたりし、大人の間違った感覚とは異なることを実感した。大人たちは、どんぐり図鑑のクヌギやマテバシイなどの実の画をみて懐かしんでいた。

(5) 参加して(個人全体所感、神奈川県内に向けて)

大熊町では復興への第一歩が始まっていると思った。大川原地区の大熊町復興拠点、給食センターなどの事業、また、植物工場や廃炉関連企業事務所設置計画などは、廃炉までの全工程の中ではわずかの進捗であるかもしれないが、町民の雇用も創出し、植物工場ができれば大熊町産の食材が産まれる。中間貯蔵施設建設候補地も、町と住民が積極的に対応したいという感を受けた。

神奈川県に避難している福島県民は、現在2800人であるが、その内、大熊町民は200人であり、その半数100人が横浜に避難している。

福島県や各自治体は、神奈川県内に避難した住民が孤立しないよう支援に努め、故郷の自治体の現状や復興へ向けての取り組みなど様々な情報を提供している。今回訪問した大熊町も横浜市などに職員を派遣し、避難者を様々な形でフォローし、神奈川県民センターで講演したことがある。しかし、聴衆のほとんどは災害ボランティアで、被災地情報や現地が必要としている支援が何かなどが一般の神奈川県民に届く機会は少ない。

震災発生後、かながわ「福島応援」プロジェクト(kfop)やその他のボランティア団体が設立され、現地での支援活動の他、避難した福島県民をサポートし交流を促進する行事、福島産食材の販売などを行うなどして、被災地への理解と支援を訴えているが、それがより広く、より多くの神奈川県民に伝わるよう、一人一人が周囲の人に話し、インターネットなどもより多くの人にアクセスしてもらえようという検討と工夫が必要である。

豊かで安定している現代の日本社会では、人々は公德心が強く、優しく、情緒豊かであるといわれる、それは日本人の美点である。反面、論理的な判断や厳しさよりも身の回りの見方や、エゴイズムや過剰反応に陥り易く、風評にも弱い。震災後、京都市は陸前高田市の津波で枯れた松の木を大文字焼きで炊くことを拒否した。横須賀市の一部の住民は岩手県の漁網の焼却灰を県営廃棄物処分場に処分することを拒否した。これらは一部住民の過剰反応、エゴイズムであると思う。災害に際して助け合う心は全国でひろがってきたが、これらの過剰反応やエゴイズムに対しては、松の木や漁の放射線量と日常生活で被ばくする線量、健康保持上の許容線量などを、機会をとらえて周囲の人々に説明し、また、常にインターネットなどで説明していくことが必要と思われる。

かつて、開港した時点の横浜の住民はほとんどが外部から移住してきた人々であった。

また、関東大震災で壊滅した横浜市では当時の人口 45 万人のうち 13%にあたる市民 58,000 人が神戸市・大阪市・名古屋市などに避難民として受け入れてもらったことを忘れることはできない。

東日本大震災で、アメリカ合衆国海軍は友達作戦を実施して救難活動をしてくれたが、関東大震災の時もすでに第一回友達作戦を実施して日本を助けてくれている。

(6) 大熊町様へ（町長、町役場、町民の皆様へ）

かながわ「福島応援」プロジェクト (kfop) もこれまで南相馬市小高地区社協などの地区で、被災者宅の家屋や屋敷内外の片付け・清掃・伐採・草取りなどの活動を続けてきた。

その活動の中で、「戻らない。」という被災者もおられたが、「平成 17 年 4 月にはここに戻りなもので、その頃もう一度ここを訪ねてください。」と、帰還へ向けて強い意欲を示す被災者もおられた。帰還・非帰還の判断は被災者のご意思であり、他者であるボランティアは、依頼者の指示に従って粛々と片付けなどするのみであるが、私個人としては、やはり、「帰還したい。」と聞くと力が湧く思いであった。

NPO 大熊町ふるさと応援隊の渡部理事長のお話を伺って、帰還を希望する大熊町民の前向きな姿勢を応援したいと思った。

そのためには、中間貯蔵施設の用地問題の解決と早期搬入を決断しなければならないと思った。

大熊町役場、復興拠点

大川原地区の大熊町復興拠点、給食センターなどの事業、また、植物工場や廃炉関連企業事務所設置計画などは、積極的に復興への第一歩を歩みだしたと感じた。大熊町が 1 F 廃炉工事と中間貯蔵施設建設候補地という最も困難な課題を前にして先送りするのではなく、また、廃炉までの全工程の中ではわずかの進捗であるかもしれないが、大胆に進む

町民の雇用も創出し、植物工場ができれば大熊町産の食材が産まれることになる。

国の計画や施策に乗ることはリスクもあるかも知れないが、この原発事故の処理と復興計画については、リスクもとらないような事業や計画では何も生まれないと思う。

また、昨年秋実施した大熊町住民への町への帰還についてのアンケート調査結果では、戻らないが 57.9%、戻りたいが 13.3%、判断つかないが 25.9% とのことであった。

約 1300 人の町民と廃炉工事や工業団地などで働く約 2000 人の新住民との大熊町であるが、後ろ向きにではなくて、今後を前向きに考えていけばよいと思う。たとえば、開港した時点の

横浜の住民は外部から移住してきた人がほとんどであった。

町民の皆様へ

大熊町・富岡町・双葉町では、1Fの放射性物質漏れ、汚染水流出などでしばしば問題となった1～3号機建屋、汚染水・地下水対策など現場状況の改善工事がようやく完成したばかりで、復興工事はこれからであり、放射線量は依然として高い。各所に山積された除染土を詰めたフレコンバッグを1F付近に設ける中間貯蔵施設建設候補地に移し、廃棄物を減容焼却施設で処理して初めて、現在の居住制限区域や避難指示解除準備区域への住民の帰還が可能となる。大熊町・富岡町・双葉町では、原子炉格納容器撤去・燃料棒回収・溶融した核燃料取り出しなど30～40年にわたる廃炉工事を見据えつつ、各町ごとあるいは広域連合で復興事業を策定すべく計画している。

いわき市内の大熊町好間工業団地第三応急仮設住宅自治会の市川会長から、震災発生時から町ぐるみ避難にいたるまでの混乱と対応、連絡・広報の課題、輸送・救護の問題点、避難先での衣食住の問題、ボランティア活動の立ち上げなどについて、東日本大震災発生時の実際の体験に基づく次のようなお話を伺うことができた。すなわち

- ・混乱防止には、幼稚園などの保育士の園児に対するような言葉づかいが有効である。
- ・擁護老人施設入院者などがバス等で遠距離避難することで病状が悪化することが多い。
- ・大熊町でも震災の死者124人のうち、直接死は11人、関連死113人であって、高齢者などの震災弱者に対する意識が、致し方なかったとは言え、不十分であった。
- ・体育館などでの雑居避難の場合、通路で行・列を区分してあると、緊急患者発生などに際して有効である。

これらの体験に基づく意見は、同様な事態に直面した場合、適切に対応するための貴重な示唆となった

仮設住宅を訪れて

いわき市の好間工業団地の大熊町第三応急仮設住宅を訪問し、市川自治会長の呼びかけで、居住者7名（男性2、女性5で若い世代はいなかった。）に出席いただき、フリーな懇談会を開催した。私の隣の女性は、当初、会津若松市に避難したが、気候が厳しく、浜通りの仮設住宅に移転して本当によかった。買い物が不便であるが、我慢できる範囲と話された。その隣の男性は1F建設当時から原発建設工事に従事し、その後、その専門的な技術で全国各地の原発工事現場を歩いたと話した。

大熊町の現状については悲しいと言ひ、復興には時間がかかる。大熊町の復興は帰還する町民が少なく、家族の就職、教育、医療などの条件が悲観的であると語った。

教育については、会津若松の歴史的な成果や伝統から、町立学校以上に評価していた。

途中から、小学生の兄妹が来たので、持参したどんぐり独楽で遊んだが、自分で独楽を作りたいというので、ドリルでどんぐりに穿孔し、楊枝を刺し、頂部を輪状に着色するまでを教えて、その後、自分で作らせた。子供たちはどんぐり全体を緑色に着色したり、トトロやドラえもんを描いたりし、大人の感覚とは異なることを実感した。大人たちは、どんぐり図鑑のクヌギやマテバシイなどの実の画をみて懐かしんでいた。

J. VILLAGE

最初に訪問した J. VILLAGE では、猪野部長のお迎えを受け、館内の案内と震災発生時と現在の使われ方、今後の方向などについて説明を受けた。

平成 17 年 10 月、ダム工事総括管理技術者認定事業合格者の現地研修で木戸ダム（檜葉町）をモデルダム、J. VILLAGE を研修会場として実施し、審査委員・研修生と共に宿泊した。当時は日本のサッカーナショナルチームの練習場として美しいピッチが 10 面以上あり、高級ホテル並みの宿泊棟があったが、1 F の爆発事故発生とともに、事故対応拠点となり、ピッチは駐車場に、J. VILLAGE の建物全体が人々で溢れかえった。

現在、環境省直轄で平成 31（2019）年の練習場再開に向けて、除染が始めているが、これは、J. VILLAGE の復興のみでなく、檜葉町・広野町の復興の一步とも言える。

地域内のダムについて

私は昭和 46 年に日本ダム協会に就職した。最初の任務はダム技術専門の月刊誌の編集であった。昭和 48 年 3 月号で、灌漑用水と全機運転開始した 1 F の原子炉冷却水の供給を目的として建設された坂下ダム（大熊町）を掲載した。その後、浜通りのダムはじめ県下のほとんどのダムを掲載した。

その後ダム工事総括管理技術者の資格試験を担当し、真野ダム（飯舘村）、三春ダム（三春町）、木戸ダム（檜葉町）、滝川ダム（富岡町）などで、各方面に大変お世話になった。浜通りの人々、流域の状況、地形・地質など記憶に強く残っている。東日本大震災発生時、坂下ダムは 1 F が津波で全電源を喪失した後も、今も冷却水の送水にスタンバイしている。

また、農地が耕作できなくなったので、灌漑用水の供給はなくなったが、放置された住宅・田畑・山林などの消火用水・野火止め用水としても使われている。

木戸ダムは檜葉町の住民が避難して無人になってからも、J. VILLAGE の水道用水に利用され、レストランの調理にも使われている。大熊町の給食センターの調理用水も木戸ダムから供給している。

滝川ダムも富岡町の灌漑用水を供給地する田畑がなくなったが、大熊町に隣接しており、野火止め用水などに利用されていると思われる。

多くの事業費で建設されたダムが、目的が変わっても働いていると聞き、安心した。

【参加者9】

(1) 大熊町内視察して(事実・感じたこと)

・J ヴィレッジの中を見せて頂きました。サッカー練習場だったグラウンドには沢山の車が止めてありました。作業員の方たちがここからバスに乗り換えて第一原発に行くと言っていました。2019年4月から全面再開し東京オリンピックにむけてサッカー日本代表チームの合宿や練習に使用する計画だそうです。復興して行けることはとても喜ばしいこととは思いますが、若い人たちが活動する場にするのに、本当に安心できるのか、正直なところ心配です。

・給食センターは第一原発の廃炉にあたる作業員の食事を改善するために今年の3月に完成し6月に開業したそうです。立地場所が今のところになったのは、作業の方のために温かい食事を提供するのベストな距離と時間だからと説明されました。食材にもこだわり、県内産のお米や野菜をできるだけ使って調理している。町の復興計画では、給食センターの近くに植物工場を建設し、そこで栽培されたものを食材として使っていきたいと考えているそうです。

廃炉作業、作業員の方々の健康管理はとても大切なことだと思います。食事環境が改善されて健康状態が保たれていくこと、いいことですね。

・大熊町は梨が美味しくて、鮭が川に戻る町であるということに参加して初めて知りました。梨と鮭を持っているくまのキャラクターの看板が町のあちこちに取り付けられているのを見ると、大熊の町がどれだけ郷土の誇りとしてこられたか良くわかりました。それなのに、手入れの行き届いていた自慢の梨畑に、梨の木よりも背の高い雑草が生い茂っていました。美味しい梨を作ってこられた果樹農家さんの胸中を思うと悲しくなりました。

・大熊町の復興に向けて大川原地区が先行して整備に着手していたあたりは、新しい家が多かった。町の計画予想の通り戻られる方が多くなり、活気のある町になっていただけたらという希望はありますが、反面、本当に予想通りになっていくのかな？と疑問に思うところがあります。

(2) 復興拠点にて復興計画ご説明研修を伺って(事実・感じたこと)

復興拠点で風間さんから避難されている方の仮設での生活の今の現状のお話がありました。震災のことが風化し、忘れられてきていて心配だと言う声を聞く。忘れないで伝えていって欲しいとの願いがある。

仮設では避難先の住民との摩擦や誹謗中傷などを警戒する日々があったり、大熊町の出身だと知られたくないと思う人がいたりする。

避難生活に必要な支援を用意されている支援にはギャップがあると言っていました。『必要な支援とは、心にリスクを抱える方、家族への継続的なケアであり、避難者を支えるスタッフへの支援。それと過剰すぎず、未来への希望をいただける支援であって欲しいと言っていました。』神奈川にいる自分にこれからの支援ってできるのだろうか、どうしたら支えになれるのだろうか？できることがあるとすれば忘れないこと、伝えて行くこと。そして今回のように福島に行ってできることをさせていただくことくらいかなと思いました。

私達の時間が足りなかったせいか、復興整備のお話はあまり伺えなかったような気がしました。町で用意して下さった復興整備計画図や整備イメージ図を見ると復興が進められているようにも見えるのですが、バスで回って頂いた場所はまだ道半ばで、まだまだ時間がかかることだと思います。それに町が、復興準備が整いましたからどうぞお帰り下さいと言っても、どの位

の人たちが戻られるかわからないです。イメージ図の中の集合住宅ゾーンとされている場所の一部にも除染廃棄物仮置き場となっているところもありました。もちろん安全を確保して、安心して住める環境にしてから住宅を建設するのでしょうかけれど、やっぱり心配だし、本当に大丈夫なのかなと思う。こんなこと思っちゃいけないのかも知れないけど…。

帰ろうとしている方には申し訳ないですけど、本当は戻れたらいいのと思う気持ちと何か言えない複雑な気持ちです。

(3) 特定非営利法人大熊町ふるさと応援隊様のお話を伺って(事実・感じたこと)

渡部さんから NPO 法人を立ち上げたいきさつをお話していただきました。

震災直後はボランティアの人達に助けってもらっていたけど、少ししたら、何でもかんでもやってもらってばかりしてはいけない。自分たちでできることは自分でしょう。そう声をかけあって、自主ボランティアをすることを決めた。例えば、送られてきた衣類を切ってお手玉を作った。中にはカップ麺等の発砲スチロールを小さく切って入れた。軽くてお手玉の役割を果たさなかったけれど、それをにぎにぎすると手の運動になるとお年寄りから喜ばれた。すごい発想だなと感心した。

ボランティアするのに「何もできないんだけど」と言ったら「声は出せるでしょ」と言われて声掛けして歩いて回ったと言っていた。すごい言葉だと思った。何もなくても誰にでもできるすばらしいボランティアだと思う。体育館で大勢で生活していると具合が悪くなっている人にも気づかない、そこで「大丈夫ですか」とって声をかけて回る。その通路を確保した。これは避難している方々の様子を知るのにとっても大切なことだと思った。いつ自分達も同じような環境になるかもわからない。そんな時に役立つ知識です。忘れずに記憶に残しておきたいです。

自主ボランティアをすることによって自分はやってもらってばかりじゃなくて、人のためになることをすることができると嬉しくなりだんだん元気になってきたと言っていました。

近所の人差し入れてくれたお米でおにぎりを作り、野菜で味噌汁を作り、皆で食べた。

2000 人分の位の量を作るために避難している何人もが力を合わせて作った。

手が痛くて大変だったけど温かい食事は美味しかったと言う。避難生活の中で大変なのに皆さんが協力し、助け合いながら頑張っていたんですね。

お二人の伺ってどうしようもないくらい辛い生活の時は他人に頼らなければならないけれども、いつまでも頼りっぱなし、甘えっぱなしでは生活は良くなっていかないんだ、ということをお話していただきました。

(4) 好間工業団地第三応急仮設住宅を訪問して(事実・感じたこと)

自治会長の市川さんに仮設の中を案内してもらい、家族世帯の部屋と単身の方のお部屋を見せて頂きました。その後集会所にて朝の早い時間の訪問でしたのに皆さんにお集まり頂き、お話を伺わせて頂きました。やはり仮設の暮らしは隣通しの話し声や生活音が聞こえてきてお互い気を使って生活していらっしゃるとのことでした。

多くの方とお話しは出来ませんでした。向かい側にすわられたお二人の方とお話しさせて頂きました。失礼なことにお名前を聞きそびれてしまい、最後までおかあさんと呼ばせていただいていた。

そのおかあさんの最初の一言は「見に行ってくれたのが一、ひどかったんべー」という言葉でした。何と答えたら良いか言葉に詰まっていると「おれらも見て来たんだ一、あだになっちゃってな一」またまた言葉が見つからずいました。そしたら「遠いところ来てくれてありがと

ない、気にかけてもらっていて嬉しいよ」と言って下さいました。涙がこぼれました。おかさんも泣いていました。

何ができているわけでもなく、避難されている方のお話を聞きに伺っただけなのに感謝されるなんて、本当に申し訳ない気持ちになりました。

少しずつおかあさんたちが避難されていた時の状況等を聞かせてもらい、今の仮設に落ち着かれた経緯を知ることができました。会津の方、埼玉の方やらと、いろんなところに20回位も引っ越しを繰り返したそうです。そうしているうちに自転車に乗っていたという足は膝が痛くなり、歩くのに杖が必要になりました。耳が片方、もう片方と両耳の聞こえが悪くなり、補聴器を付けられていました。

どれだけの心労やストレスがそうさせてしまったのか、考えても考えてもきっと自分の身におきてみるまで分かることではないのかも知れません。

仮設の皆さんは同じような経緯を辿って今の生活をしていらっしゃるのだから、何ができるわけではないけれど、寄りそってあげたらいいなと思います。

「気にかけてくれて嬉しい」という言葉の裏に、忘れられてきているんだなと感じていることを知った気がしました。

(5) 参加して(個人全体所感、神奈川県内に向けて)

バスの中から見させていただいた大熊町は、復興にむかって除染、整備が進められていましたが、また別の場所から見た風景は雑草が背が高く伸び放題になっていたり、立派なお家の前はゲートで塞がれていました。大熊町は役場の方、仮設にいらっしゃる方、皆さん前向きに頑張っていると思います。私のできることなど微々たるものですが、これからも被災地のことを忘れずできることは積極的にやっていくことだと思っています。大熊町だけでなく被災された方々は、忘れられていってると言う不安な気持ちを持っていらっしゃることも、今回参加させてもらって改めて感じました。風化させることのないように知っていることは伝えていきたいと思っています。

(6) 大熊町様へ(町長、町役場、町民の皆様へ)

大熊町、町長様、役場の志賀課長様、風間係長様、お忙しい中町内を案内いただきありがとうございました。

渡部様、大切なお話が伺えてとても勉強になりました。災害にあったときに役立つ知恵を授けていただいたと思います。

市川様、とてもパワフルな自治会長さん、お忙しい中仮設訪問ではお世話になりました。住民の皆さんと有意義な時間を過ごさせて頂きました。有難うございました。

これから冬に向かい寒くなってまいります。大熊町の皆様、どうぞお身体を大切にお過ごしください。

【参加者10】**(1) 大熊町内視察して(事実・感じたこと)**

原発立地町の大熊町は原発に近く、将来はとても厳しいと思っていました。しかし、今回大熊町の今の状況を見て感じる事ができ、特に先行除染が進められていることや町の復興拠点の準備が進められていることに、将来に向けて歩み始めていることを知り得たことは大きな収穫でした。

東電の給食センターが、大熊町の復興拠点の近くとはいえ居住制限区域内に建っていましたが、調理から配食までの時間規制を受けて大熊町に建てられたことを知り、このような状況でも一般の規制が適用されるのかと少し複雑な思いを持ちました。給食センターの周りには将来植物工場が計画されていますが、同行して頂いた大熊町の志賀課長に伺ったところ、路地での栽培は無理で水耕栽培が計画されているとのこと、さすがに原発の近くでの農業は無理のようです。

(2) 復興拠点にて復興計画ご説明研修を伺って(事実・感じたこと)

復興拠点の説明の前に風間係長から、震災時そしてその後の避難の経験をお話してくださり、淡々とお話されていましたが、長期間に渡っての大人数での町民避難を行政としてサポートする立場はととてもとても大変であったことが伝わってきました。

復興のお話を伺って、大熊町の復興は復興の基本的な概念ができたところ、と感じました。原発に近くて線量が高く町の大部分が帰還困難区域であり、最終処分場も未定なので、町の復興の具体的な内容が決まるまでは、まだまだ長い時間がかかるものと思いました。

(3) 特定非営利法人大熊町ふるさと応援隊様のお話を伺って(事実・感じたこと)

渡部理事長さんと市川副理事長さんからそれぞれ、震災時そしてその後の避難の貴重な経験を伺うことができました。想像を絶する大変さがあったと思いますが、お二方とも避難先での生活をより良くしようと、前向きで精力的に動かれたことが伝わってきました。

また、住民のみなさんの将来に対する意見をこまめにまとめて都度行政側に知らせているとのこと、ふるさと応援隊の方々是一般住民と行政を繋ぐ大事な役目も果たしていると思いました。

(4) 好間工業団地第三応急仮設住宅を訪問して(事実・感じたこと)

仮設支援ではなく訪問であったにもかかわらず、十名くらいの方々が参加して下さい、とても明るくたくさんのお話を頂き、また、震災当時そして今のお気持ちを伺うことができました。

お話し下さったWさんは飼い猫を家に置いて非難されましたが、動物愛護のNPOの方々が大熊町に入って餌を与え続けてくれたおかげで、約1年後元の家で再会できたとのこと、いろいろな方々が全町避難を支えていることを改めて認識しました。なお、お話を伺った後猫ちゃんに会いましたが、仮設で飼い主さんと一緒に何事もなかったかのようにゆったりと過ごしていました。

(5) 参加して(個人全体所感、神奈川県内に向けて)

ほんとうに貴重な視察でした。現地に行く前は、原発立地町である大熊町の将来はとても厳しいものと思っていました。しかし、行政は復興拠点を計画して新しい町作りを構想し、また、現地への一時立入が始まって水木を除く週5日2人以上の団体に自家用車や行政のバスを使って一時立入が可能となっており、一人年30回の制限はあるものの代表者を変えて同行という形

を取れば30回以上の一時立入ができ、今年の8月末までに延8万人を超える多くの方々が一時帰宅されており、5時間という制限時間内でご自宅の掃除等が行なわれています。大熊町に住み続けたいと願う住民の方々が少なからずいらっしゃるということを、改めて認識しました。ただ、復興や帰町には長い時間が必要であり、特に若い世代は難しい判断をしなければならない時が来たあるいは来るであろうことは容易に想像できます。それでもなお、大熊町に住み続けたいと願う方々が少なからずいらっしゃることを忘れずに、町の復興が具体化される日が来ることを願わずにはられませんでした。

(6) 大熊町様へ(町長、町役場、町民の皆様へ)

この度の大熊町視察研修に際して、それぞれ貴重な時間を割いてご対応頂いた、大熊町役場の方々、J ヴビレッジの方々、給食センターの方々、NPO法人大熊町ふるさと応援隊の方々、そして明るくたくさんのお話をして頂いた好間工業団地第三応急仮設住宅の方々、本当にありがとうございました。大熊町の今の状況を見て感じる事ができ、とても貴重な一日でした。先行する三陸沿岸地域の復興は、順調に進んでいるところばかりではなく行政と住民の間に齟齬をきたしているところも見受けられます。大熊町の復興にはまだまだ時間がかかると思いますが、大熊町に住み続けたいと願う住民の方々等と行政の方々が力を合わせて、大熊町の復興が具体化される日の来ることを、心から願っています。ありがとうございました。

【参加者11】

(1) 大熊町内視察して(事実・感じたこと)

J ヴィレッジ(東京電力福島復興作業拠点)

震災当時第一原発事故拠点として使用していたが近隣の警戒区域解除に合わせて各機能を移転(第一原発へ)

現在は、資材倉庫や作業員駐車場など従事者のバックアップ用に使われていると感じた。

今後J ヴィレッジ復旧へ向けた取り組みをおこなう計画で進めていく

見て感じた事は、殺伐とした空気があるかと思っていた部分もあり緊張感を持って視察させていただいたが拍子抜けした。

出入口に東電からのお知らせや現場改善状況などだれでも見れるようにしていることや、安全の取り組みなどについてはもう少し派手に広報したほうが市民の理解も得られやすいのではないかと?

東電の職員関係者の取り組みがあまりにも過小評価され忘れられることは、近隣の市町村も利益にはならないと思う。

今忘れない、正しく伝えるなら、東電は現行の活動+広報にも積極的に力を入れていただきたいと思いました。

大熊町内視察(帰還困難区域)

人口8,815人

町民の95%が居住していた地域が帰還困難区域となっている。

町として、5年間は帰町しない判断を行った。

町内を視察しての感想は、除染作業者と野生動物、植物がいるゴーストタウンである。

乗車されたかたが色々ご説明をしていただきましたが、復興へむけて私たちが取り組む内容を盛り込みながら説明していただくともう少し違った見方もできると思う。

福島給食センター

原発で作業されている人に温かい食事を提供し環境を整える目的はとても共感できた。

地産地消の取り組みで福島県産を3割使い貢献しているところも貢献していると思う雇用も地元+市内外からの応募もあり創出が見えてきてよかったと思う。

今後の課題は、採算をとれない状況では設備投資、改善が見込めないなのでそこを見直していく事、東電だけに食事提供をしているものを仮設や学校、病院などに提供できる仕組みを作ると非常時に稼働できない点は改善が必要だと思う。

(2) 復興拠点にて復興計画ご説明研修を伺って(事実・感じたこと)

復興計画について感想

先の見えない夢の計画を聞いているようだった。

この町を復興させる拠点を大川原地区に整備予定し先行して帰還困難区域の除染も行っている。

大熊町の約40%を居住区残りは山林となっていてこの大熊町の資産をどう使うか自分が戻ってきたい、他の市町村が計画に賛同したい、計画がはたしてできているか

1,550世帯いた大熊町の方たちが笑顔で帰れる環境を行政は考えてほしい

この厳しい環境の中で時間だけが過ぎていき、震災も風化していく

【震災と原子力災害の支援の形】

忘れない・正しく伝える・知る・考える

災害から自分や家族を守る・故郷を守る

防災手段の一つになる

上記を達成するには、近隣の市町村が一体となって進めていかないと難しいのではないかと

研修の中で、市町村との情報共有は？と問いかけた時に

時間をおいて、担当者レベルでは・・・と

走り出すスピードで、見せる力で決まると思います。

微力ですが一生懸命お手伝いをさせていただきます。

がんばっていきましょう。

【参加者12】**(1) 大熊町内視察して(事実・感じたこと)**

フレコンバッグの黒の凶々(いまいま)しさ。

セイタカアワダチソウの黄色の猛々しさ。

町に入るとそんな色彩が目飛び込んでくる。

至る所でのぼりがはためいていて、不動産かと思ったら、そこには「除染作業中」と書かれていた。

放射線は目に見えないけれど、フレコンバッグは目の前にある。原発事故の傷跡として、そこにある。

検問。人の良さそうな警備員と、その口から発せられた「内閣府」という言葉の落差。

さらに奥へ。

放置された駅、無人の商店街、歓声が聞こえてこない学校、家々を閉ざすバリケード、車が通らない道路、黄色で点滅し続ける信号機。

町役場に隣接する体育館の前をバスで通った時、中の様子が見えた。

ほんの一瞬だったが、布団や段ボールがそのまま、4年間の避難所生活が凍結されていた。

大慌てでさらなる避難が強いられたことが伺えた。

目にした風景のひとつひとつが原発事故の怖さ、恐ろしさを教えてくれる。

そうした中、常磐線でおこなわれていた作業や給食センターでの活動の様子は、復興への動きを垣間見たように感じた。

(2) 復興拠点にて復興計画ご説明研修を伺って(事実・感じたこと)**(3) 特定非営利法人大熊町ふるさと応援隊様のお話を伺って(事実・感じたこと)****(4) 好間工業団地第三応急仮設住宅を訪問して(事実・感じたこと)**

被災者から聞いた話。被災者から聞いた別の被災者の話。参加者から聞いた被災者の話。

いろんな話が頭の中でゴチャ混ぜになっている。

家中に飛び散ったガラスの破片。停電でテレビがつかず全然情報がなかった。申し訳ないと思いつつも見捨ててしまった。

普段なら1時間で済む道に5時間かかった。避難の車で免許不携帯を警官に咎(とが)められた。逃げても逃げても娘に追いつかない。

避難所では幼稚園のベテラン先生が大人をなだめていた。「赤いきつね」は見るのもイヤ。

空き巣狙いの話。泥棒さんの話。認知症の親御さんと障害をもつお孫さんの話。

避難指示と自主避難の違い。補助金が貰える、貰えないで住民同士が反目。避難先で出て行けと落書きされた。

大熊町の町民と名乗れない。避難先での集まりにも顔を出さない。

仮設住宅と学校の往復でガソリン代がかかってしまう。帰るのはもう諦めろと子供から言われ

た。「悔しい」

ひとつひとつが具体的で、その分、心に重くのしかかってきた。

(5) 参加して(個人全体所感、神奈川県内に向けて)

8月の福島53便で南相馬を初めて訪れ、帰りに国道6号線を通った。

車窓から見た沿道の風景に痛々しさを感じ、「もっと被災地のことを知っておかなければ」と思って今回の視察に参加した。

実際に現地で見聞きしたことはとても貴重な体験となった。

バスから降りる機会が少なかったのは残念だったが、線量がまだまだ高いことの裏返しだろう。

(いま思うと、通り過ぎるのではなく駅や役場でしばらく停車して、同行していただいた方からしばらくお話をいただいても良かったのではないか)

被災者の方から直接話を伺えたのは良かった。

ただ、足繁く通っているのならともかく、飛び込み同然で訪れた「見物人」を前にして被災者の方に戸惑いはなかったか(ことに仮設住宅の方)と思うと、心苦しさを感じた。

こちらの方もどこまで突っ込んだ質問をしているのか迷った。たとえば東電の寮で働いていた自治会長さん。「いま、東電のことをどう思いますか」と尋ねてみたかったが、結局は聞かず仕舞い。

そうした戸惑い、あるいは歯がゆさも含めての「視察」なんだと思う。

視察の狙いに「正しく知る」が挙げられているが、その通りのことを自分が実践できたのか、正直なところ心許ない。

正しく知ることはまだまだとしても、せめて「知らんぷりしない」ことだけは肝に銘じておこうと思う。

東京電力について。

大熊町に向かう途中で立ち寄ったJヴィレッジ。施設の一角には周辺の小学生から贈られた寄せ書きが展示されていた。

「事故を起こした張本人に対して感謝の言葉？」 意外感があった。

Jヴィレッジを案内していただいたのは東電の職員。本人たちは口にできなかったけれど、彼等もまた被災者と後から教えられた。南相馬を訪れた時、東電の職員もボランティアに参加していたことを思い起こした。

東電については悪いイメージでとらえがちだったが、決して一様でないことを思い知らされる。原発の背景には国のエネルギー政策、それを求める国民が存在している。過疎や雇用の問題もあるだろう。

福島のごとは、沖縄の基地問題にも通じる図式がある。

最後に、最近接した漫画と映画から引用します。

「先の見通しが立たない」「進まない被災地復興」などと紋切り型に語る前に、少しずつでも前

に進んでいる部分にも目を向けてはいかがでしょうか。

—— 先週刊行された漫画『いちえふ～福島第1原子力発電所労働記』より

微力かもしれないが無力ではない。

—— 9月公開のドキュメンタリー映画『首相官邸の前で』より

(6) 大熊町様へ (町長、町役場、町民の皆様へ)

案内していただいた大熊町町役場の方、休日返上に加えて大臣視察でお忙しい中、本当にありがとうございました。

お話をしていただいた方々、当方の聞き下手・話し下手を今でも申し訳ない気持ちでいっぱいです。

被災地のことを考え続け、周囲に伝えていくことで少しでもお返しができればと思います。

【参加者13】

(1) 大熊町内視察して(事実・感じたこと)

・帰還困難区域～住民の1人は「完全、除染には、あと30～40年かかる」と展望なき明日に、いまだ茫然自失の体だった。

・放射能汚染ゴミの「中間貯蔵地」候補となったことについて

～行政は「地権者との間で土地買収交渉が思うようにいかず、汚染ゴミの貯蔵庫確保には多くの困難がある」といっているが、行政が用地買収交渉に来たのは3年くらい前に1度だけ。それ以降は音沙汰なし。

行政が言う「(地権者たちの抵抗があり)遅々として進まない」との喧伝に首を傾げている。

・人が住まず、イノシシなどが街中を闊歩する現状に、

「街は、もはや自然動物園、と化した」と自嘲気味に語った町民の言葉が胸に突き刺さりました。

・なお、いまだ空き巣などの泥棒が横行。住民の心配事は絶えないという。

(2) 復興拠点にて復興計画ご説明研修を伺って(事実・感じたこと)

◆「2つの災害と向き合う大熊町」という演題で町関係者からお話を伺った。

・震災・原発事故が起こった時、何処から出た指令かわからぬまま(?)「(車に)乗って西へ逃げろ」が合言葉に。

住民はいうまでもなく、役場職員でさえ「行き先がわからぬままの逃避行」だったとか。住民大移動・緊迫した避難行動に息を飲み聞き入りました。

・地震・津波による直接被害は、宮城県に比べれば軽微だった、とか。

ただし、いま現在に至るも上下水道、道路整備などインフラ改修は進んでおらず、見通しも立たず、町民たちは帰町への絵図が描けないという。

・大震災当初、避難先でコンビニ店員から「アンタたちに売ると、地元の人たちに売るのがなくなってしまう」と買い物拒否されたこともあったという。その心無い言葉に、思わず涙が…。

◆新たな大熊町復興モデル地区「スマートシティ」づくりに向け、行政が動き出した。

・「平成30年までに(スマートシティ建設を)やる」とはいうが、「いつ、どこまで、どのように」やるか、住民には周知徹底していない。

スマートシティ建設と歩みを同じくして、町民自身の生活設計を図りたいと多くの町民は望んでいるというのだが、大熊町復興プランがわからず、再起に向けどう動いていいのか、途方に暮れるばかりという。

(3) 特定非営利法人大熊町ふるさと応援隊様のお話を伺って(事実・感じたこと)

・震災時の住民の規律正しき行動に、世界中の人たちが感動の嵐との報道だったが、～実際は、ギューギュー詰めの体育館などの避難場所では、喧嘩などのトラブルが多発。厳しい現実、身が引き締まる思いだった。

(4) 好間工業団地第三応急仮設住宅を訪問して(事実・感じたこと)

・避難先を20数回転居せざるを得なかった。

そのたびに病院、買い物先などを新たに見つけねばならなかったという。その心労やいかばかりだったろう……。

- ・いまだ帰還困難区域に置かれた住民は「ふるさとの我が家は、許可証がなければ入れない」と、無念さ一杯に唇を振るわせていた。
 - ・仮設住宅は隣家との間を仕切る壁が薄く、隣の話し声やTVの音が筒抜け。それが原因でのご近所同士のいがみ合いはシバシバとか。住環境の悪さでストレスはたまる一方という。
 - ・いま、「大熊町民です」と公言できない雰囲気があり、身を縮めて暮らしているとも。たとえば、「いわき市内の病院待合室、隣に座った人との世間話途中で“アンタ、どこから来たんだい?”と聞かれ、“大熊町”と応えるや、“いいね、賠償(金)いっぱいもらって!”と、心無いやっかみ言葉が。
- 同避難民は“もう、病院に行きたくない”と呟く。
- ・地元住民と避難町民との間で軋轢(あつれき)も。たとえば、仮設住宅を狙った「打ち上げ花火」や、そこかしこに落書きも。時間の経過とともに、歓迎されなくなった身。心を痛めているという。
 - ・賠償一つをとっても、線を引く(格差を設ける)のは国や東電、それに地元行政。その結果が、何の罪もない避難民が理不尽な批判・中傷に会い、苦しめられている、現実があるという。

(5) 参加して(個人全体所感、神奈川県内に向けて)

- ・大震災から4年半が過ぎ、矛盾、問題点が水面下に根深く蔓延(はびこり)り始めている。いま、町民は悩みを吐き出せず悶々とする日々という。
- ・我々ボランティアは、「会い」「話を聞き」「寄り添う」——そんな「他愛もないこと」の重要性を痛感した研修でした。

(6) 大熊町様へ(町長、町役場、町民の皆様へ)

- ・行政の皆様へ～大変ご苦労様です。あなた方のご努力とご心労の報われる日が来ることを切に、切に願っております。
- ・避難町民の方へ～心は、いつでもあなた方のことを思っております。一緒に、手をつないで生きていきましょう。

【参加者14】

(1) 大熊町内視察して(事実・感じたこと)

県・市・郡・町 どこかにくくって考えがちだか

同じ被災者、避難者といってもひとりひとりみなちがう

J ヴィレッジで働く人たちもその多くが現地の方々。

原発に関わって生活してきた人達の中には後ろめたさ、責任を感じて自分を責め続けている方もいると聞く。

“廃炉推進カンパニー、なるものが設立され、働く人の健康維持をうたいできた立派な”給食センター“ 復興に向けての努力は分かるが違和感が残る。

毎日大量に出る使用済のタイベックススーツの処理にも行づまりが見えているとのこと。

“世界レベルの安全性”、“巨大地震を想定して”と言うが

想定外は起こるもの。人手におえないものはやはり動かすべきではないと思う。

(2) 復興拠点にて復興計画ご説明研修を伺って(事実・感じたこと)

富岡町にうかがった時同様、現場で働いている方の話はマスコミ通しては得られないもの。

震災前の大熊町の魅力もはじめて知るものだった。

避難と言っても20数回転々とした方もいたと聞く、当時の混乱がいかほどであったかと改めて感じるものあり。

笑い話のように話してくれた、赤いきつねの山、2000人分のお湯・・・行政として平等に分ける、ということのむずかしさ、ご自身も被災者でありながら責められることもあるなかで心身ともに参らない方が不思議な状況であったのだろうと推測する。

復興拠点のイメージ図が住民にとってより良い形で現実化しますように。

悪いのは国と東電ともおっしやっていた。

大臣は何を見て何を感じて帰られたのか。

(3) 特定非営利法人大熊町ふるさと応援隊様のお話を伺って(事実・感じたこと)

生きる力を感じるお二人

パニックにおちいりそうな中、その場その場の判断力がすばらしく

個人的にも様々な困難の中、周りに目を向け、何ができるのか

何をすべきかを考え、行政職でも心身の調子をくずす中、今もなお支援する側でいらっしやることに感服。

自分なら・・・と考えた時に何ができるのか、何ができるのか

今回聞いた話を少しでもムダにしないようにしたい。

(4) 好間工業団地第三応急仮設住宅を訪問して(事実・感じたこと)

ここにたどりつくまで何度場所を替えたか

着の身着のまま家をでて、こっちの体育館、あっちの体育館、県外の旅館

お話をした方は、震災前は自転車とびまわっていたが、車中に2日いる間にヒザが悪くなり、現在は杖をつく生活、もう御一方もストレスからか見の動きが悪くなったと。

生まれ育ち、暮らした街にはもう住めないとわかっているが

「あきらめな」と子や孫に言われてもあきらめきれない、捨てられないと涙を流しておられた。

(5) 参加して (個人全体所感、神奈川県内に向けて)

除染が進んでいるというが限られた地区のかわらを1枚ずつふく作業にゴールは見えない線引きされ、中間貯蔵施設予定地とされた住民の補償はどうなっているのか。物理的に距離があり、日々様々な事がおこる中、自分の周囲でもどこかひとつごと。“終わったこと”のようになってしまっている感がある。

- ・ 忘れない (知る)
- ・ 考える (感じる)

そして伝えることが防災手段のひとつになる
神奈川にも横須賀があり、原子力の通り道になっている
わが身のこととしてとらえることが必要だと思う。

(6) 大熊町様へ (町長、町役場、町民の皆様へ)

今回の視察・研修の為に時間を取って下さりありがとうございました。
風間係長さん、読み聞かせで培った力はさすが、とても聞きやすいお話でした。
仮設は、日曜の朝、多数でおじゃましたにもかかわらず多くの方々に集まっていたいただき、本当に感謝感謝です。

今なお不自由な生活が続く中、楽しみを見つけ前向きに暮らしている皆さんのこと忘れずにいることがせめてもの支援かと。お元気で過ごされること祈ります。
なべさん始めドライバーの皆様、東さん、ありがとうございました。

【参加者15】

(1) 大熊町内視察して(事実・感じたこと)

95%が帰還困難地区という、誰もそんな状態になるとは思っていなかった場所をみせていただいて

わたしでさえつらいと思いました、大熊の人々はどんなでしょうと思うばかりでした。

駅、役所、図書館、小学校、高校、商店街、店、住宅、果樹園、熊川、保健センターの屋根、鉄道

どれもこれも、あの時まで生活をしていた場所です。

志賀さんの車が置いたままの役所、風間さんが働いていた図書館

あれもこれも、そのままに放置されていることが厳しい現実でした。

大熊町は、復興拠点を基に新しく変わり始めたところなのでしょう、前へと少しでも進んでほしいと思います。

除染、線量、廃炉とたくさんの問題が山のようにあります、いつまでも今日見たことを忘れることなく、応援をさせていただきたいと思います。

(2) 復興拠点にて復興計画ご説明研修を伺って(事実・感じたこと)

95haの復興拠点、模型を見せていただき、風間さんからお話を伺いました。

今年から始まった給食センターも小宮さんから丁寧な説明を受けました。

当時の避難するまでのお話し、皆さんがどうしていけばいいのかという不安、怒り

大熊の方々の避難先での痛み、苦しみやふるさとへの思い

震災から4年を過ぎ、これからの大熊町へ向けて少しでも希望が出てくるといいと思います。

給食センターも雇用と地産地消(米・豚肉・野菜・卵・牛乳)を生み出す一つになっていくようです。

福島にいくつかの企業が進出し始めています、反面、中間貯蔵施設や除染、インフラ、コミュニティの復活とこれからの問題を少しでも進み

仕事、生活が見えてくるといいと思います、どのくらいの方が実際、帰町されるのかわかりませんが、皆さんのふるさとへの思いを大事に

復興計画が進むことを願います。

(3) 特定非営利法人大熊町ふるさと応援隊様のお話を伺って(事実・感じたこと)

渡部さんが保育士であったと聞き、災害時に保育士さんがとてもよく動き、活動し、現在もさまざまな活動をなさっている方が多く

あらためて、なぜだろうと？思いました。

柔軟な発想、対応、分かりやすい話が子供を対象にできる＝大人も動かせる力になっているのかもしれない。

さまざまなストレスを緩和するためにも、役割分担、生きるために必要とされていると思えることが大切であり、情報の大切さを教えていただきました。

避難時にたまたま着ていた、大熊町防犯ジャンパー、家近くの原発と汚染水タンク、国の対応の隔たりなど、感じるものがありました。

市川さんの食堂を通しての付き合いと人柄が避難するとき、避難所で垣間見えるお話でした。もう少し待てば帰れると思ってから、4年。福島は広く、浜へ戻る人が増えた理由も教えていただきました。

大切な通帳・食料・衣類は持ってという、言葉もありがたく伺いました。

ふるさと応援隊のスタディツアーには、ぜひたくさんの方々に参加していただけるといいなあと思います。

特に再稼働された原発、稼働予定近くに住む人々には帰還困難区域、原発の姿をぜひ見ていただきたいと勝手に思っています。

(4) 好間工業団地第三応急仮設住宅を訪問して(事実・感じたこと)

だいぶ人が減ってきてはいるとはいえ、ここに残らなくてはならない人々がいらっしゃるのも現実。

自治会長の市川さん、元気な吉田さんのお宅の話や日々の話、今も大熊の家へ戻っている話、避難時の話を伺い、長崎さんが持っていらした地図をみながら大熊の話も伺えました、少しだけ町を見てきたのであの辺りと思える場所が頭に浮かびました。

市川さんは前日帰られた後に、ラベンダー入りの匂い袋を作り、私たちに配ってくれました、とてもうれしかったです。

仮設からのツアーの企画もあり大熊町がどれだけ大切なのかが少しわかる気がしました。

またいわきへ出向くときには、ぜひお目にかかりに立ち寄りしたいと思います。

(5) 参加して(個人全体所感、神奈川県内に向けて)

やはり、厳しい現実があるのだと、分かっているでも無力感を覚えます。

私自身、福島での活動が皆さんのように活発にはありませんが、少しずつ増やしていきたいと思っています。

いわき、広野、檜葉、富岡、大熊、双葉、浪江、南相馬、相馬、新地

今までは通り過ぎることはあっても、立ち寄ることのなかった場所へ出かけることが増えました。

大熊町で復興拠点に復興住宅へどのくらいの方が戻ってこられるのかわかりませんが、人々の意見を町に上げ、町民が戻りたいと思える場所になるといいと思います。

J-ヴレッジで、お昼と見学もすることができ、Tepcoの方からお話も伺うことができ貴重な時間を過ごすことができました。

(6) 大熊町様へ(町長、町役場、町民の皆様へ)

皆さん、大変お世話になりました。

これからICもでき、復興拠点が出来上がることで、どんな町へと変化をしていくのかを楽しみにしています。

まだまだ、廃炉まで時間もやるべきこともたくさんありますが、大熊町を大切に思う町民が、いつも元気な笑顔をみられるような町になるといいですね。

【参加者16】

(1) 大熊町内視察して(事実・感じたこと)

大熊町の様子やかつての人々の暮らしぶりについてお話を伺うことで、原発事故の影響の大きさを改めて実感いたしました。

原発の事故以来、町から人の暮らしが消え、建物こそ残ってはいいても樹木が繁茂し、野生の動物が行き交い生活や文化が自然の中に飲み込まれて行く様子が見てとれました。

家屋の中に入らぬよう鉄製の柵で堅く閉ざされたその理由を伺い、更なる災難に晒(さら)されているこの事実には愕然といたしました。日本の弱さが一度に露呈されてしまったようにさえいたします。

廃炉作業もまだ始まったばかりの厳しい状況下、事故の起きた第1原発から最も近いこの町に町民が帰還することは非常に困難と置いていましたので、今回訪問させていただき、大熊町が復興計画を策定し事業をすすめている事は正直驚きを隠せません。また、復興拠点となる地域と中間貯蔵施設までの距離の近さや施設へつながる輸送経路等、疑問は幾つかあるものの、この事業そのものが前へ進むとする町民の心に明かりを灯す大切な火種である様に思えました。その取り組みが成功した暁に大熊町の再生が実現することを心から祈るばかりです。いつの日か人が戻り、活気ある大熊町の姿を車窓から見えるススキ原に映してみつつ。

東京電力の事業として、かつてJリークの拠点だったJヴィレッジの現在の姿とその役割、そして本来のJヴィレッジへの再開の見通しについてお話を伺い、ほんの少し明るい気持ちになりました。原発廃炉作業を支える作業員の健康管理と雇用促進、そして地産地消を狙いとした給食センターは、食材の調達からゴミの処理まで徹底した管理がなされた素晴らしい施設であり、「企業の責務」と言う担当者の言葉がとても印象に残りました。

(2) 復興拠点にて復興計画ご説明研修を伺って(事実・感じたこと)

震災当時から避難生活の中での数々のご苦労された様子をお伺いしました。震災と原発事故と言う二重苦の中で物的な苦労だけでなく、人との摩擦や軋轢(あつれき)などの辛苦を味わいながら厳しい状況下、「大熊町の状況を多くの人に知ってもらおう」と言う理念の下、被災された当事者の方が法人を立ち上げられたと言う渡部代表のその行動力に驚きました。活動内容も多岐にわたり、中でも今回紹介された「将来の町を描くワークショップ」はとても興味を惹くものでした。参加者がどの様な希望を持ち将来の大熊町の夢を描いていらっしゃるのか伺ってみたくもありました。前へ進むための原動力は将来の夢を描くこともその一つなのだとお話を伺い実感いたしました。

また、渡部さんのお人柄からは、人と人を繋ぐお力を感じ、この様な時こそ、その資質が必要とされるのだと感じさせられました。

(3) 特定非営利法人大熊町ふるさと応援隊様のお話を伺って(事実・感じたこと)

・仮設住宅の立地や住環境の状況を知ることができました。世帯集を確保するためにやむを得ない事とは言え、不自由な環境で5年近く生活をしていらっしゃる方々のご苦労のご様子には胸が痛くなりました。

・仮設住宅にお住まいの方々に直接お話を伺うことで、暮らしぶりやお困りの点等を幾つか伺うことができました。震災と原発事故により住む家だけでなく職も失い経済的にもひっ迫した状況で不自由な仮設住宅での暮らしのご様子やご自身の得意とされる手芸を教えることがきっか

けで仮設住宅の中でつながりができていった様子を詳しくお話ししていただきました。ここで作られたコミュニティーはこの先どうなるのか気になりましたが、怖くて質問ができませんでした。

(4) 好間工業団地第三応急仮設住宅を訪問して(事実・感じたこと)

先ず初めに、今回大変貴重な研修を受けることができたこと、ご準備くださいました渡辺さん初めスタッフの皆様にご心より感謝申し上げます。

父に代わり父の故郷へお手伝いできることがあれば継続していきたい。そして福島の現状をもっとよく知りたい。そんな思いで研修に参加させていただきました。

参加するまで、大熊町は、県内でも最も帰還が困難なエリアだと思っておりましたので、復興計画の話をお伺い、明るい気持ちで帰って来ることができました。そして、お話を伺った方々からも、この数年先を事を見据えながら今を暮らしていらっしゃるご様子が見てとれ、私自身よく知らず、誤解していた部分もあり、そう言う意味でも研修させていただいたことはとても価値のあることだったと改めて感じました。今は、順調に廃炉作業が進み、大熊町の方々一日も早く穏やかな生活に戻られる日がくることをお祈りするばかりです。そして、その様子を見守らせていただき、お手伝いさせていただくことがあればそれにお応えしていけると良いのではないかと思います。

(補足)

1. 視察研修便参加者アンケート集計 < () 内は回収・回答数です。 >

(1) 参加のきっかけ

- a (9). 福島でボランティアをしたかった
- b (0). 街中掃除をしたかったから
- c (6). 日程や行程がよかったから
- d (0). 知人・友人にさそわれて
- e (1) その他
 - ・大熊町の今を知りたかったから。
 - ・福島支援を続ける中、現況を知ることが大事だと思ったから。
 - ・大熊町の視察に参加したかったから。

(2) 出発前の kfor からの案内

- a (13). ちょうどよかった
- c (1). 多すぎた
 - ・前回のように写真付きの身分証明書が必要のメールがあったら良かったかな。

(3) 今回の活動(視察研修)は如何でしたか

- a (12). 非常に満足
- b (5). 満足
 - ・仮設住宅を訪問する時間が約束より早かったことが気になりました。市川さんにも朝のお仕事がおありだったようですし・・・。
 - ・今の熊野町を少し知ることができた。JV へ行かれたこと。
 - ・みなさんの説明が良かった。
 - ・バスから降りる機会が少なかったこと。もちろん、そうせざるをえなかった事情、なべさんをはじめ企画に関わった皆さんのご苦勞を重々承知した上での、欲張った「不満」です。

(4) 活動(視察研修、全般)時間について

- a (11). 今回と同じでよい
- b (). 16時位まで、4時間位
 - ・視察の時間ちょうど良い

(5) これからも参加したいですか

- a (13). 参加したい
 - ・理念が共感できるため
 - ・特に普通では出来ない現地の視察には参加したい

(6) 活動(視察研修、全般)についてのご感想・ご意見・伝えたいこと

- ・視察便の下準備の数多さを想うと、とても代表を酷使している、申し訳なきでいっぱいになる。顔つなぎは代表であるとしても、もう少し何かできないかと、切実に感じ続ける2日間でした。
- ・J ヴィレッジでは、お弁当だけの予定だと思っていたのに、東電の方のお話が聞け、外の様子も見ることができて良かった。

- ・富岡町の視察の時のようにバスから降りて町の様子を見られた訳ではないけれど車窓を通して見てきた風景を町の様子をしっかりと心に刻みつけています。あまり積極的に語ることは出来ないかも知れませんが、聞いてくれる人たちがいるならば、間違いなく今の現実と状況をお話しさせていただきたいと思っています。
- ・福島の中で自分で見たことを人にお話しできるように、整理できたらと思います。
- ・今回は大熊町の皆様のご協力により貴重な経験をさせていただきありがとうございます。これも kfop の日頃の活動や調整によるものと思います。
- ・大熊町の復興に向けての息吹を感じた。廃炉まで30年から40年を要するし、いたるところに山積みされたトン袋の中間置場も全量決定したわけでもないが、ようやくできるところからできることをやっていくことが可能になったのだと思う。J ビレッジも震災前に比べると大変様であるが、それでも万里の道も一歩からというあゆみを始めていると思う。私にとっては見慣れた光景の再現ではなかった。
- ・大熊町への研修参加。ふだん見られないところまで見学できて大変有意義でした。特に、現地関係者の話が聞けて心にズシンと響きました。
- ・原発の立地町でもある(近いという意味で)大熊町の今の状況を見て知ることができ、とても有意義な視察だった。
- ・貴重な経験をさせていただきました。自分自身の中でまだうまく消化できていないところがありますが。

(7) kfop の今後の活動(全般)に期待すること

- ・相乗りさせていただく立場の者たちは少し感覚がマヒしてきている気がする。(高額になれば参加者が・・・(減る))。ボランティアがボランティアに甘えている事。(自分も)どうかしなければ、あたりまえの事のようになっていると。
- ・県内に避難されている方々もこれからの生活環境が変わっていくと思います。そういった方々のお引越しか、お家の片付け、家のまわりの草刈等のお手伝いが出来たら良いなと思っています。
- ・これからも福島応援を続けて行けるようによろしく願いいたします。下準備から活動までいつもありがとうございます。
- ・これからもボランティア、視察研修便をよろしく願いします。
- ・南相馬市の現場のような通常の活動を出来る限り継続すること。今後予定されている双葉町、浪江町の研修。大熊町も含めて、これらの町でも南相馬のような片付け、家回りの清掃・整理などのお手伝いが出来ればよいと思う。
- ・この10月にリタイアしました。費用の面もありそうたびたびは参加出来ませんが、可能な範囲で参加したいと思っています。
- ・ニーズがある限り細く長く続けてほしいと思います。小高町、大熊町の方との交流。今回のような研修。
- ・現地に行ってみないとわからないことがたくさんあります。特に現地視察の機会を作って下さることを期待します。
- ・私自身は無理のない範囲で参加しているので、運営に携わっているスタッフの方には本当に頭の下がる思いです。末長く活動を続けられることを願います。

(8) 参加者状況

性別 女性(6) 男性(7)

年代 20代(0) 30代(1) 40代(2) 50代(6) 60代(4) 70代(1)

職業 会社員(7) 自営業(1) パート・アルバイト(2) 家事専業(2) 定年(1)

被災地ボランティア経験

初めて(0) 2～3回(1) 4～5回(2) 6～9回(1) 10回以上(10)

2. 会計

【 予算A : 全体予算(実績) 】

収入				支出			
項目	金額	個数	合計	項目	金額	個数	合計
参加費	4,000	17	68,000	宿泊費	7,710	15	107,940
宿泊費	7,710	15	107,940	宿泊費	1,710	1	1,710
宿泊費	1,710	1	1,710	宿泊費(券)	6,000	1	6,000
宿泊費(券)	6,000	1	6,000	昼食代	500	20	10,000
弁当代	500	20	10,000	バス代	57,240	1	57,240
予算B	2,074	1	2,074	保険料	2,397	1	2,397
				振込手数料	432	1	432
				高速代	1,800	1	1,800
				雑費	8,205	1	8,205
合計			195,724	合計			195,724
				収支			0

【 予算B : 個別予算(実績) 】

収入				支出			
項目	金額	個数	合計	項目	金額	個数	合計
往路同乗者	2,800	10	28,000	N車高速代	9,130	1	9,130
復路同乗者	2,800	9	25,200	N車ガソリン代	10,937	1	10,937
				F車高速代	8,940	1	8,940
				F車ガソリン代	10,000	1	10,000
				F車提供費	840	1	840
				E車ガソリン代	6,700	1	6,700
				E車雑費	3,606	1	3,606
				予算Aへ補充	2,074	1	2,074
				福島56便有志寄付	973	1	973
合計			53,200	合計			53,200
				収支			0

以上

保護用紙